

## シラバス（授業計画） 目次

|                       |           |
|-----------------------|-----------|
| 1. スポーツ科学研究方法特論       | p. 1      |
| 2. スポーツ共生社会特論         | p. 2      |
| 3. スポーツインテグリティ特論      | p. 3      |
| 4. 障害者スポーツ実践特論        | p. 4      |
| 5. 発育発達学特論            | p. 5      |
| 6. 身体運動学特論            | p. 6      |
| 7. スポーツコーチング特論        | p. 7      |
| 8. スポーツ心理学特論          | p. 8      |
| 9. スポーツメンタルトレーニング特論   | p. 9      |
| 10. 実践トレーニング特論        | p. 10     |
| 11. 環境生理学特論           | p. 11     |
| 12. スポーツ理学療法学特論       | p. 12     |
| 13. スポーツ医学特論          | p. 13     |
| 14. スポーツ栄養学特論         | p. 14     |
| 15. スポーツ哲学特論          | p. 15     |
| 16. スポーツ史特論           | p. 16     |
| 17. スポーツ社会学特論         | p. 17     |
| 18. スポーツビジネス特論        | p. 18     |
| 19. スポーツマネジメント特論      | p. 19     |
| 20. スポーツ人類学特論         | p. 20     |
| 21. 保健体育科教育特論         | p. 21     |
| 22. スポーツコーチング演習 A     | p. 22     |
| 23. スポーツコーチング演習 B     | p. 23     |
| 24. スポーツフィールドスタディ演習 A | p. 24     |
| 25. スポーツフィールドスタディ演習 B | p. 25     |
| 26. スポーツ科学研究 I        | pp. 26-27 |
| 27. スポーツ科学研究 II       | pp. 28-29 |
| 28. スポーツ科学研究 III      | pp. 30-31 |

以上

□講義科目（基礎科目）

|                   |   |      |
|-------------------|---|------|
| 科目名               | スポーツ科学研究方法特論  | 2 単位 |
| 担当者               | オムニバス（新井博、荒木雅信、白石龍生、藤田紀昭、吉田文久、三井利仁、住田健、竹村瑞穂、西村直記、山根真紀、山本真史）   |      |
| テーマ               | スポーツ科学領域において修士論文を書くための方法論について学ぶとともに各自の研究テーマ、研究フレーム、研究スケジュール作る。  |      |
| 科目のねらい            | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>① スポーツ科学研究方法論 ② 先行研究 ③ 研究倫理 ④ 研究フレーム</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>本授業ではスポーツ科学分野における先行研究分析から、研究テーマや研究目的の設定の仕方、研究フレームの構築方法、適切な研究方法、データ分析の方法について学ぶ。さらに研究者として守るべき倫理について理解し、主体的に研究を進めることができる力を身につける。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>1. 修士論文を作成するための基本的知識を習得し、研究テーマを決めることができる。<br/>2. 研究倫理について理解し、説明することができる。<br/>3. 自分の研究テーマに関わる先行研究についてレビューし、まとめることができる。<br/>4. 自分の研究テーマに適切な研究方法について理解し、説明することができる。</p>   |      |
| 授業の進め方            | <p>第 1 回 オリエンテーション、スポーツ科学研究の意義、先行研究の条件等の重要性について（担当者：荒木雅信）</p> <p>第 2 回 研究者として守るべき規範及び倫理について（担当者：竹村瑞穂）</p> <p>第 3 回 研究構想の立て方について（担当者：藤田紀昭）</p> <p>第 4 回 質的研究方法①文献研究方法について（担当者：新井博）</p> <p>第 5 回 質的研究方法②フィールドワークについて（担当者：吉田文久）</p> <p>第 6 回 質的研究方法③質的研究のまとめ方について（担当者：白石龍生）</p> <p>第 7 回 量的研究方法①社会調査方法について（担当者：住田健）</p> <p>第 8 回 量的研究方法②スポーツ生理学的実験について（担当者：西村直記）</p> <p>第 9 回 量的研究方法③スポーツ心理学的実験について（担当者：荒木雅信）</p> <p>第 10 回 量的研究方法④トレーニング科学実験について（担当者：山根真紀）</p> <p>第 11 回 量的研究方法⑤コーチング科学実験について（担当者：三井利仁）</p> <p>第 12 回 量的研究方法⑥バイオメカニクス実験について（担当者：山本真史）</p> <p>第 13 回 研究構想作成（担当者：西村直記）</p> <p>第 14 回 研究構想発表会（科目担当者全員）</p> <p>第 15 回 本授業のまとめ（担当者：荒木雅信）</p> |      |
| 事前学習の内容<br>学習上の注意 | <p>&lt;事前&gt;<br/>授業の終了時に次回の内容を説明するので、その内容に沿って予習をする。（1時間）</p> <p>&lt;事後&gt;<br/>授業内容の復習をする。（1時間）</p>  |      |
| 本科目の<br>関連科目      | スポーツ科学研究Ⅰ、スポーツ科学研究Ⅱ、スポーツ科学研究Ⅲ   |      |
| テキスト              | 特に指定しない   |      |
| 参考文献              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 出村慎一・山次俊介『卒業論文/修士論文の書き方』杏林書院</li> <li>・ 監修/出村慎一 編集/山下秋二・佐藤進『健康・スポーツ科学のための調査研究法』杏林書院</li> <li>・ 出村慎一『健康・スポーツ科学のための研究法』杏林書院</li> </ul>   |      |
| 成績評価方法<br>と基準     | <p>研究構想に関する発表 50%</p> <p>研究構想レポート 50%</p> <p>100 点満点で 60 点以上を合格とする</p>  |      |

□講義科目（基礎科目）

|                   |  |      |
|-------------------|--|------|
| 科目名               | スポーツ共生社会特論   | 2 単位 |
| 担当者               | 藤田紀昭   |      |
| テーマ               | 国内外のスポーツ界に見られる格差、差別、不平等の実態について学び、それを乗り越えていくための方向性と手段について学修する。  |      |
| 科目のねらい            | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>① 共生社会 ② 障害者 ③ 人種 ④ ジェンダー ⑤ 途上国</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>共生社会とは何かについて理解したうえで、現在、スポーツの現場においてみられる様々な格差、差別、不平等などの実態について学ぶ。具体的には障害者のスポーツの実態、スポーツにみられる人種差別の実態、スポーツにおけるジェンダー問題、先進国と途上国のスポーツに見られる格差である。さらにこれらの実態を乗り越えようとしている各種事例について知り、スポーツあるいは体育を通しての共生社会の実現の理論と方法を学修する。また、これらに関する最新の研究論文の講読を行う。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>1. 共生社会の在り方、社会的背景、歴史について説明することができる。<br/>2. スポーツの現場においてみられる格差、差別、不平等などの実態について具体的な事例（障害、人種、ジェンダー、途上国）をあげて説明することができる。<br/>3. スポーツの現場においてみられる格差、差別、不平等などを解消としている事例について説明し、そのための理論と方法について説明することができる。<br/>4. スポーツを通しての共生社会形成についての研究成果をあげることができる。</p> |      |
| 授業の進め方            | <p>第 1 回 オリエンテーション<br/>第 2 回 共生社会の在り方について（歴史、社会的背景、概念）<br/>第 3 回 スポーツと障害者：格差、差別、不平等の実態<br/>第 4 回 スポーツと障害者：共生社会への取り組み事例（インクルーシブ体育を含む）<br/>第 5 回 スポーツと障害者：研究論文講読<br/>第 6 回 スポーツと人種：格差、差別、不平等の実態<br/>第 7 回 スポーツと人種：共生社会への取り組み事例<br/>第 8 回 スポーツと人種：研究論文講読<br/>第 9 回 スポーツとジェンダー：格差、差別、不平等の実態<br/>第 10 回 スポーツとジェンダー：共生社会への取り組み事例<br/>第 11 回 スポーツとジェンダー：研究論文講読<br/>第 12 回 スポーツと途上国：格差、差別、不平等の実態<br/>第 13 回 スポーツと途上国：共生社会への取り組み事例<br/>第 14 回 スポーツと途上国：研究論文講読<br/>第 15 回 本授業のまとめ</p>  |      |
| 事前学習の内容<br>学習上の注意 | <p>&lt;事前&gt;<br/>授業の終了時に次回の内容を説明するので、その内容に沿って予習をする。（1時間）<br/>&lt;事後&gt;<br/>授業内容の復習をする。（1時間）</p>  |      |
| 本科目の<br>関連科目      | スポーツ社会学特論、スポーツインテグリティ特論、スポーツ哲学特論   |      |
| テキスト              | 特に指定しない  |      |
| 参考文献              | 陣野俊史『サッカーと人種差別』文藝春秋。川島浩平『人種とスポーツ』中央公論。藤田紀昭『障害者スポーツの環境と可能性』創文企画。日本スポーツとジェンダー学会『データで見るスポーツとジェンダー』Megan Chawansky, Lyndsay Hayhurst 他『Innovations in 'Sport for Development and Peace' Research (ThirdWorlds)』Routledge   |      |
| 成績評価方法<br>と基準     | <p>期末試験 70%<br/>授業内レポート、課題 30%<br/>100 点満点で 60 点以上を合格とする</p>   |      |

□講義科目（基礎科目）

|                       |  |     |
|-----------------------|--|-----|
| 科目名                   | スポーツインテグリティ特論  | 2単位 |
| 担当者                   | 竹村瑞穂   |     |
| テーマ                   | スポーツ界における倫理的諸問題について、倫理的視点に基づき思考し、議論する  |     |
| 科目のねらい                | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① スポーツ ② 競技スポーツ ③ 応用倫理学 ④ インテグリティ<br/>           ⑤ オーセンティシティ</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           競技スポーツ界では倫理的に逸脱するような問題が度々指摘されるが、そのようなスポーツ界における倫理的諸問題について、なにがどのように問題であるのか、本当に問題であるのか、どのように解決策を見出せばよいのか、倫理的視点をもとに考察し、対話を通して議論を深めていく。また、スポーツのインテグリティを脅かそうとする問題について理解し、適切な態度や指導方法を修得することがねらいである。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           1. 競技スポーツ界において指摘されている倫理的逸脱状況について理解できる。<br/>           2. 思考の枠組みとしての理学的視点を習得できる。<br/>           3. スポーツ界における倫理的諸問題について応用的に考え、議論できる。<br/>           4. スポーツのインテグリティを守るシステムについて理解し、説明することができる。</p> |     |
| 授業の進め方                | 第 1 回 オリエンテーション<br>第 2 回 倫理学の体系について<br>第 3 回 応用倫理学としてのスポーツ倫理学<br>第 4 回 スポーツインテグリティとはなにか／哲学対話の重要性について<br>第 5 回 倫理学的方法論（1）規範倫理学①功利主義<br>第 6 回 倫理学的方法論（2）規範倫理学②義務論<br>第 7 回 倫理学的方法論（3）規範倫理学③美徳論<br>第 8 回 倫理学的方法論（4）応用倫理学<br>第 9 回 倫理学的方法論（5）メタ倫理学<br>第 10回 スポーツインテグリティについて考える（1）スポーツ指導と暴力の問題<br>第 11回 スポーツインテグリティについて考える（2）スポーツジェンダーの問題<br>第 12回 スポーツインテグリティについて考える（3）ドーピング禁止論<br>第 13回 スポーツインテグリティについて考える（4）ドーピング容認論<br>第 14回 スポーツインテグリティについて考える（5）五輪参加資格の問題<br>第 15回 スポーツインテグリティについて考える（6）ガバナンスとコンプライアンス  |     |
| 事前学習の内容<br>学習上の<br>注意 | 事前学習：スポーツのインテグリティを脅かす状況について把握する（90分）<br>事後学習：倫理理論を枠組みにスポーツの諸問題について応用的に考える（90分）<br>適宜支持する予習を行い、能動的に授業に参画し、自ら考え、積極的に発言をすること  |     |
| 本科目の<br>関連科目          | スポーツ哲学特論   |     |
| テキスト                  | 川谷茂樹（2005）スポーツ倫理学講義. ナカニシヤ出版   |     |
| 参考文献                  | 友添秀則編著（2017）よくわかるスポーツ倫理学. ミネルヴァ書房.<br>Cesar R. Torres (ed) The Bloomsbury companion to the Philosophy of sport. Bloomsbury.  |     |
| 成績評価方法<br>と基準         | 論述試験 100%  |     |

□講義科目（基礎科目）

|                   |  |      |
|-------------------|--|------|
| 科目名               | 障害者スポーツ実践特論  | 2 単位 |
| 担当者               | 三井利仁   |      |
| テーマ               | 各障害の特徴を理解し、スポーツを指導ができ、目標・効果を評価できるようになる   |      |
| 科目のねらい            | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>障害論、指導法、トレーニング理論、マネジメント</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>スポーツ基本法の基本理念には、「障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない。」とある、本講義では、スポーツへのきっかけ、日常化について理解し、さらに強化方法と環境整備について具体的に理解する。また、ヒトがスポーツを継続するためにはヒトの環境に合わせた指導法について学ぶ。障害者スポーツ指導は状況の違うヒトへのスポーツ指導の基本であり、障がい者だけではなく、広くヒトを指導する基本となることができる。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>1. 研究を遂行する上で必要な基本的知識を理解し、活用できる。<br/>2. 基本的な知識を基盤として、指導現場における課題を研究計画につなげることができる。<br/>3. 既存の文献で得られた知見について、指導実践への具体的活用を説明できる。<br/>4. 障害者スポーツ研究者としての基本的態度を身に付け、真摯な態度で研究を遂行することができる。</p> |      |
| 授業の進め方            | <p>第 1 回 ガイダンス</p> <p>第 2 回 我が国における障害者スポーツ政策について</p> <p>第 3 回 タレント発掘事業の現状</p> <p>第 4 回 アスリートパスウェイの基本構造</p> <p>第 5 回 地域における障害者スポーツの普及の現状</p> <p>第 6 回 パラスポーツ競技団体における強化育成の現状</p> <p>第 7 回 車いす競技者の走動作の理解</p> <p>第 8 回 義足使用者の走動作の理解</p> <p>第 9 回 脳原性麻痺者の走動作の理解</p> <p>第 10 回 視覚障害者の走動作の理解</p> <p>第 11 回 義肢装具に関すること</p> <p>第 12 回 地域における障害学生の体力測定の実際 1 新体力測定</p> <p>第 13 回 地域における障害学生の体力測定の実際 2 持久系能力・形態計測</p> <p>第 14 回 体力測定結果のまとめ</p> <p>第 15 回 測定結果のフィードバック</p>  |      |
| 事前学習の内容<br>学習上の注意 | <p>履修上の注意</p> <p>予習：該当する内容について、参考書などを熟読し、疑問点などを明確にして授業に臨むこと。</p> <p>復習：授業内容を深めるとともに、不明確な内容については再度学習すること。</p> <p>その他：授業には積極的な姿勢で参加すること。</p>   |      |
| 本科目の<br>関連科目      | スポーツ共生社会特論   |      |
| テキスト              | 随時、独自に制作された配布資料を用い、その中で参考書などを紹介する。   |      |
| 参考文献              | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. アダプテッド・スポーツの科学—障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論(矢部 京之助, 草野勝彦他)</li> <li>2. リハビリテーション医学・医療コアテキスト 日本リハビリテーション医学会 (著)</li> <li>3. 障がい者スポーツ指導教本—初級・中級 日本障がい者スポーツ協会</li> </ol>  |      |
| 成績評価方法<br>と基準     | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 平常点は、授業中のプレゼンテーション、さらに予習・復習で行われるノートの整理、グループワーク課題の記載を 30 点</li> <li>2. さらに、授業中の各種グループワークへの取り組みの態度を 20 点</li> <li>3. 定期試験による出題への知識・理解、さらに研究的思考力を 50 点</li> <li>4. 3つの合計 100 点中 60 点で合格点とする。</li> </ol>   |      |

□講義科目（基礎科目）

|                   |  |     |
|-------------------|--|-----|
| 科目名               | 発育発達学特論  | 2単位 |
| 担当者               | 白石龍生   |     |
| テーマ               | 健常者および障害者の枠を超えて発育発達現象の評価法を確立し、スポーツ実践の適時性について考究する。  |     |
| 科目のねらい            | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ①発育発達学研究の方法 ②発育発達現象の評価法 ③障害者スポーツと発達</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           発育発達学は、乳幼児期、学童期、青年期および老年期にわたる発育発達に関する課題を明らかにし、それらを解決し、すべての人々の健康の保持増進に寄与するための科学である。日本人の身長最大の発育年齢は戦後急速に若年化したが、近年その傾向は緩やかになり、定常状態となっている。最大発育年齢が若くなるということは、思春期が早く訪れることを意味している。この体の発育に対してこころをはじめとした発達が同時進行すれば問題はないが、必ずしもそうではないようである。そこで発育発達に関する現代的課題を明らかにし、課題解決に向けた手法を疫学的アプローチを基に新たに学修する。</p> <p>&lt;学習目標&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 発育発達という現象が、どのような条件や要因によって規定され、また影響されるのかについて体系的にとらえ、発育発達に関する現代的課題を明らかにすることができる。</li> <li>2. 人生90年時代を迎える中で、すべての人々が生きがいを持って生活できる共生社会を実現するために発育発達学の立場から寄与できる。</li> <li>3. 過度のスポーツ実践は、取り返しのつかない身体的、精神的な負担を伴うことにも十分配慮し、スポーツ実践の適時性についても常に配慮することができる。</li> <li>4. 乳幼児期、学童期および青年期の身体発達を主に扱うが、子ども達の発育発達に関する課題解決が、健常者および障害者の枠を超えた普遍的なスポーツ実践につなげることができる。</li> </ol> |     |
| 授業の進め方            | 第1回 現代の子ども達の健康課題と発育発達<br>第2回 身体発達の概観<br>第3回 身体発達の課題（疾病との関わり）<br>第4回 身体発達の特徴（生涯保健との関わり）<br>第5回 健常児および障害児の運動能力の発達と加齢変化<br>第6回 エネルギー代謝の加齢変化<br>第7回 筋力の発達とトレーニング効果<br>第8回 持久力の発達とトレーニング効果<br>第9回 調整力および柔軟性とトレーニング効果<br>第10回 障害児の運動能力の発達と加齢変化<br>第11回 障害者のトレーニング効果<br>第12回 身長の最大発育年齢の年次推移<br>第13回 思春期の健康とオーバートレーニング<br>第14回 個々の成熟度に応じた発育発達現象の評価<br>第15回 発育発達研究とスポーツ科学との関わり  |     |
| 事前学習の内容<br>学習上の注意 | 履修上の注意<br>予習：発育発達現象に関わる課題について、あらかじめ学習しておくこと。調べたことについて30分程度のプレゼンテーションができるよう準備しておくこと。<br>復習：授業で得られた知見や疫学的アプローチを他分野でも生かせるようにすること。   |     |
| 本科目の関連科目          | 身体運動学特論、スポーツ医学特論、スポーツ心理学特論、スポーツ共生社会特論  |     |
| テキスト              | 樋口満、佐竹隆著、高石昌弘（監修）からだの発達と加齢の科学、大修館、2012   |     |
| 参考文献              | J. M. Tanner 著、林 正（監訳）「成長のしくみをとく - 胎児期から成人期までの成長のすすみ方 -」、東山書房、1994<br>竹内義博、大矢紀昭「よくわかる子どもの保健」第3版、ミネルヴァ書房、2016   |     |
| 成績評価方法と基準         | 毎回の授業の際の発表（30%）、文献購読の達成度（30%）およびデータの分析及び考察（40%）で評価し、総合評価60%以上を合格とする。   |     |

□講義科目（専門科目）

|                   |   |      |
|-------------------|---|------|
| 科目名               | 身体運動学特論   | 2 単位 |
| 担当者               | 山本真史  |      |
| テーマ               | 身体運動の仕組みに関する理解を深める。   |      |
| 科目のねらい            | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>①身体運動 ②バイオメカニクス ③神経科学</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>身体運動は脳からの指令によって骨格筋が収縮することで制御される。そのため、身体運動を深く理解するためには力学をはじめとする（狭義の）バイオメカニクスの習得とともに、骨格筋制御の礎である脳など神経系の構造と機能についても十分に習得することが肝要である。そこで本科目では、バイオメカニクスおよび神経科学の視点から、身体運動の仕組みについてより専門的な理解を図るために、両視点での最新の研究知見を含めたレビューを行う。また、本科目で紹介する身体運動研究の知見が、日常生活やスポーツの実践の場でどのように応用され得るか検討を行う。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>1. バイオメカニクスおよび神経科学の研究知見を基に、身体運動の仕組みを専門的に理解することができる。<br/>2. 日常生活やスポーツ実践の場に対して、身体運動研究の知見を具体的に应用するための方策を考案することができる。</p>  |      |
| 授業の進め方            | <p>第 1 回 身体運動に関する概説<br/>第 2 回 身体の構造と機能（バイオメカニクス研究のレビュー）<br/>第 3 回 身体の構造と機能（神経科学研究のレビュー）<br/>第 4 回 身体運動の仕組みに関するバイオメカニクス研究のレビュー（日常生活）<br/>第 5 回 身体運動の仕組みに関する神経科学研究のレビュー（日常生活）<br/>第 6 回 日常生活の質的向上に対する身体運動研究の知見応用の検討<br/>第 7 回 身体運動の仕組みに関するバイオメカニクス研究のレビュー（スポーツ①：走動作）<br/>第 8 回 身体運動の仕組みに関するバイオメカニクス研究のレビュー（スポーツ②：用具操作）<br/>第 9 回 身体運動の仕組みに関する神経科学研究のレビュー（スポーツ①：走動作）<br/>第 10 回 身体運動の仕組みに関する神経科学研究のレビュー（スポーツ②：用具操作）<br/>第 11 回 スポーツ実践での能力向上に対する身体運動研究の知見応用の検討<br/>第 12 回 身体運動の測定に関わるバイオメカニクスの手法のレビュー<br/>第 13 回 身体運動の測定に関わる神経科学的手法のレビュー<br/>第 14 回 身体運動研究における各種手法の応用の検討<br/>第 15 回 身体運動研究の展望に関する全体討議</p> |      |
| 事前学習の内容<br>学習上の注意 | <p>当該内容について、下記の参考文献などを熟読して授業に臨むこと。<br/>当該内容について、講義とともにディスカッションを行いながら授業展開する。<br/>授業内容に関する疑問が生じた場合は、積極的に質問をすること。</p>  |      |
| 本科目の<br>関連科目      | スポーツ心理学特論、スポーツコーチング演習 A   |      |
| テキスト              | 特に指定しない。  |      |
| 参考文献              | <p>① R. M. エノーカ『ニューロメカニクスー身体運動の科学的基盤ー』西村書店（2017）<br/>② D. A. ウィンター『バイオメカニクスー人体運動の力学と制御ー』ラウンドフラット（2011）<br/>③ 太田順ほか『身体性システムとリハビリテーションの科学 1ー運動制御ー』東京大学出版会（2018）</p>   |      |
| 成績評価方法<br>と基準     | 数回の課題レポートにより評価し、総合評価 60 点以上を合格とする。  |      |

□講義科目（専門科目）

|                   |   |      |
|-------------------|---|------|
| 科目名               | スポーツコーチング特論   | 2 単位 |
| 担当者               | 三井利仁  |      |
| テーマ               | 指導者は選手の競技力を向上させ、成果を上げさせることにある。選手を育成・強化するコーチング能力、コミュニケーション能力を身につける。  |      |
| 科目のねらい            | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>① 競技力向上 ② 人間力 ③ 方法論</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>コーチングはヒトの能力を向上させる手段であり、この講義では、あらゆるヒトの運動能力をいかに計画的、効率的に向上させていくかを取り上げていく。本特論ではトップアスリートだけではなく広く、コーチングを活かせる知識について理解する。特に構成要素の中でも情報、計画立案について応用的に考える。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>1. ヒトがスポーツ機範に基づき、主体的、継続的にスポーツを楽しむ事を理解することができる。<br/>2. 単に競技力向上だけではなく、指導者として正しいコミュニケーションのとり方、情報利用の方法について理解することができる。<br/>3. 年齢、体力、技術、環境に応じて、快適にスポーツを享受できるように、スポーツとの関わりを主体的にコーディネートする資質や能力を広く学び、競技者が人間力向上の上に競技力が向上することの重要性を理解することができる。</p> |      |
| 授業の進め方            | 第 1 回 オリエンテーション<br>第 2 回 コーチングとテーチングについて<br>第 3 回 スポーツコーチングの在り方<br>第 4 回 競技力の構成要素について<br>第 5 回 <b>コーチングにおける倫理的視点とコンプライアンス(NF内リスクマネジメントを含む)</b><br>第 6 回 育成行動・指導行動について<br>第 7 回 コーチングサイクルと PDCA サイクルについて<br>第 8 回 スポーツ情報<br>第 9 回 スポーツと情報活用について (ICT)<br>第 10 回 アナリストデータの活用<br>第 11 回 パラアスリートによる講話<br>第 12 回 スポーツコーチングの方法① (集団型)<br>第 13 回 スポーツコーチングの方法② (個人型)<br>第 14 回 スポーツコーチングの方法③ (障害者スポーツ)<br>第 15 回 競技団体の取り組み   |      |
| 事前学習の内容<br>学習上の注意 | 履修上の注意<br>予習：該当する内容について、参考書などを熟読し、疑問点などを明確にして授業に臨むこと。<br>復習：授業内容を深めるとともに、不明確な内容については再度学習すること。<br>その他：授業には積極的な姿勢で参加すること。   |      |
| 本科目の<br>関連科目      | スポーツ共生社会特論、スポーツ心理学特論、実践トレーニング特論   |      |
| テキスト              | 随時、独自に制作された配布資料を用い、その中で参考書などを紹介する。  |      |
| 参考文献              | 1. Coaching: Coaching Strategies: The Top 100 Best Ways To Be A Great Coach (Sports Coaching Strategies for Conditioning (Ace McCloud : 編)<br>2. 図解 コーチングマネジメント 人と組織のハイパフォーマンスをつくる (伊藤守 : 編)<br>3. 伸びる人のデータの読み方、強い組織のデータの使い方—全日本女子バレーボールチーム・アナリストが教える情報戦略 (渡辺 啓太 : 編)   |      |
| 成績評価方法<br>と基準     | 1. 平常点は、授業中のプレゼンテーション、さらに予習・復習で行われるノートの整理、グループワーク課題の記載を 30 点<br>2. さらに、授業中の各種グループワークへの取り組みの態度を 20 点<br>3. 定期試験による出題への知識・理解、さらに研究的思考力を 50 点<br>4. 3つの合計 100 点中 60 点で合格点とする。  |      |



□講義科目（専門科目）

|                   |  |     |
|-------------------|--|-----|
| 科目名               | スポーツ心理学特論  | 2単位 |
| 担当者               | 荒木雅信   |     |
| テーマ               | スポーツのこころと身体つながり  |     |
| 科目のねらい            | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① 心身のつながり ② 運動の制御と学習 ③ 運動の認知 ④ 障害者スポーツ</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           スポーツにおける心理学的諸問題に関する最新の知見や事例を概観することにより、当該領域の動向に関する理解を深める。主に、次の4つのテーマに焦点を当てて講義を展開し、スポーツにおけるこころと身体つながりについての理解を深める。<br/>           1) 運動制御と運動学習の理論の理解とその効果的な応用法の検討<br/>           2) 運動の認知に関する理論の理解とその応用例の検討<br/>           3) 競技者やチームに対して施す心理サポートの理論と技法の理解、その効果と評価の検討<br/>           4) 障害のある競技者の心理的変容プロセスに関する理論の理解と事例の検討<br/>           ここで扱う理論と技法は、学校体育や障害者スポーツの指導にも援用できるので、これに関する文献や事例についても検討する。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           スポーツ心理学の理論とその指導現場での活用を学修し、心身のつながりについての理解を深める。</p> |     |
| 授業の進め方            | 第 1 回 オリエンテーション<br>第 2 回 運動制御に関する諸理論のレビュー<br>第 3 回 運動制御に関する応用と課題の検討①（速さと正確性の関係について）<br>第 4 回 運動制御に関する応用と課題の検討②（予測について）<br>第 5 回 運動学習に関する諸理論のレビュー<br>第 6 回 運動学習に関する応用と課題の検討①（フィードバック学習）<br>第 7 回 運動学習に関する応用と課題の検討②（モデリング学習）<br>第 8 回 運動の認知に関する諸理論のレビュー<br>第 9 回 運動の認知に関する応用と課題の検討①（運動イメージについて）<br>第 10 回 運動の認知に関する応用と課題の検討②（情動感情について）<br>第 11 回 心理サポートに関する諸理論と技法のレビュー<br>第 12 回 心理サポートに関する効果と評価の検討<br>第 13 回 障害のある競技者の心理的変容プロセスに関する諸理論のレビュー<br>第 14 回 障害のある競技者の心理的変容プロセスに関する事例の検討<br>第 15 回 スポーツの心理学的諸問題に関する全体討議  |     |
| 事前学習の内容<br>学習上の注意 | シラバスに基づき、講義内容についての予習を行い講義に臨むこと。提示した各テーマについて、講義とプレゼンテーションを交えて授業を行う。   |     |
| 本科目の<br>関連科目      | スポーツメンタルトレーニング特論、身体運動学特論、スポーツコーチング演習 A   |     |
| テキスト              | 特に指定しない  |     |
| 参考文献              | R. シュミット（調枝孝治監訳）「運動学習とパフォーマンス」大修館書店 1994.、増原光彦（監修）「動きを生み出すこころとからだのしくみ」あいり出版 2004.、山崎勝男（監修）「スポーツ精神生理学」西村出版 2012.、内田若希「自己の可能性を拓く心理学」金子書房 2017.、荒木雅信（編著）「これから学ぶスポーツ心理学 改訂版」大修館書店（2018）.、樋口貴広ほか『身体運動学－知覚・認知からのメッセージー』三輪書店（2008）  |     |
| 成績評価方法<br>と基準     | 授業におけるプレゼンテーション（30%）、テーマ毎の課題レポート（70%）により総合的に評価し、60点以上を合格とする。   |     |

□講義科目（専門科目）

|                   |   |     |
|-------------------|---|-----|
| 科目名               | スポーツメンタルトレーニング特論  | 2単位 |
| 担当者               | 荒木雅信  |     |
| テーマ               | 心理サポートと競技者の人格形成と自立  |     |
| 科目のねらい            | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>① 心理サポート    ② 人格形成    ③ 自立</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>競技者への心理サポートの理論と技法およびその評価法に関する最新の知見と事例を通してその動向についての理解を深める。特に次の4つのテーマに焦点を当てて講義を展開する。<br/>1) 競技者やチームに対して行うスポーツメンタルトレーニングやスポーツカウンセリングなどの心理サポートの理論と技法の理解<br/>2) 競技者やチームに施す心理サポートの効果および競技者の心理状態の評価<br/>3) 競技者の人格形成や心理的成長に関する理論の理解と事例の検討<br/>4) 心理サポートと他専門領域サポートの効果的な連携と立ち位置の検討<br/>ここで扱う理論と技法は、効果的な指導や競技者および指導者のセカンドキャリア、また障害者スポーツの指導にも関係するので、これに関する文献や事例についても検討する。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>心理サポートにおけるスポーツメンタルトレーニングの理論と活用についての理解を深め、カウンセリングマインドの醸成を図ることができる。</p>  |     |
| 授業の進め方            | <p>第 1 回 オリエンテーション<br/>第 2 回 スポーツメンタルトレーニングの理論と技法の理解①（自己評価法）<br/>第 3 回 スポーツメンタルトレーニングの理論と技法の理解②（目標設定法）<br/>第 4 回 スポーツメンタルトレーニングの理論と技法の理解③（思考法）<br/>第 5 回 スポーツメンタルトレーニングの事例の検討<br/>第 6 回 スポーツカウンセリングの理論と技法の理解①（運動イメージ）<br/>第 7 回 スポーツカウンセリングの理論と技法の理解②（投影法）<br/>第 8 回 スポーツカウンセリングの事例の検討<br/>第 9 回 心理サポートの効果および競技者の心理状態の評価法①（HR, 脳波の測定と利用）<br/>第 10 回 心理サポートの効果および競技者の心理状態の評価法②（語り, ライフライン）<br/>第 11 回 心理サポートの効果および競技者の心理状態の評価法についての事例の検討<br/>第 12 回 心理サポートと他専門領域サポートの効果的な連携と立ち位置の検討<br/>第 13 回 競技者の人格形成や心理的成長に関する理論の理解<br/>第 14 回 競技者の人格形成や心理的成長に関する事例の検討<br/>第 15 回 心理サポートに関する諸問題に関する全体討議</p> |     |
| 事前学習の内容<br>学習上の注意 | シラバスに基づき、講義内容についての予習を行い講義に臨むこと。提示した各テーマについて、講義とプレゼンテーションを交えて授業を行う。  |     |
| 本科目の<br>関連科目      | スポーツ心理学特論、身体運動学特論、スポーツコーチング演習A  |     |
| テキスト              | 特に指定しない   |     |
| 参考文献              | 日本スポーツ心理学会（編）「スポーツメンタルトレーニング教本（三訂版）」大修館書店（2016）.、中込史郎「危機と人格形成」道和本書院（1993）.、中込、鈴木（編著）「スポーツカウンセリングの現場から」道和本書院（2015）.、荒木雅信（編著）「これから学ぶスポーツ心理学 改訂版」大修館書店（2018）.、   |     |
| 成績評価方法<br>と基準     | 授業におけるプレゼンテーション（30%）、テーマ毎の課題レポート（70%）により総合的に評価し、60点以上を合格とする。  |     |

□講義科目（専門科目）

|                   |   |      |
|-------------------|---|------|
| 科目名               | 実践トレーニング特論  | 2 単位 |
| 担当者               | 山根真紀  |      |
| テーマ               | ライフステージに応じたトレーニング処方 of 理論と活用  |      |
| 科目のねらい            | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① ライフステージと健康 ② 科学的トレーニング ③ 子どものトレーニング<br/>           ④ 中・高齢者のトレーニング ⑤ 女性のトレーニング</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           人々が運動やスポーツの楽しさを享受しつつ、健康かつ文化的で豊かなスポーツライフを送るためには、健康や体力の保持・増進が重要であることを理解する。さらに加齢とともに低下していく体力を維持あるいは低下の程度をできるだけ抑えるため、あるいは生活習慣病の予防のため運動やスポーツを習慣的に実施しなければならないことを蓄積された科学的知見から理解する。そのうえで、様々な対象の特徴を理解し、科学的知見に基づいたトレーニング処方を安全に立案・活用できる実践力を養う。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           1. トレーニングの科学的理論を理解し、活用できる。<br/>           2. ライフステージに応じた健康づくりの重要性について理解を深め、分析できる。<br/>           3. ライフステージに応じたトレーニング処方を立案できる。<br/>           4. 個々のニーズを理解し、継続的なトレーニング実施を支援・指導できる。</p> |      |
| 授業の進め方            | 第 1 回 オリエンテーション<br>第 2 回 ライフステージにおける健康課題<br>第 3 回 トレーニングの科学的知見の整理（論文抄読）①ウォームアップとクールダウン<br>第 4 回 トレーニングの科学的知見の整理（論文抄読）②レジスタンストレーニング<br>第 5 回 トレーニングの科学的知見の整理（論文抄読）③有酸素トレーニング<br>第 6 回 トレーニングの科学的知見の整理（論文抄読）④その他のトレーニング<br>第 7 回 科学的知見に基づいた発育発達とトレーニングの理論<br>第 8 回 科学的知見に基づいた発育発達とトレーニングの実際<br>第 9 回 子どものトレーニング処方（発表）<br>第 10 回 科学的知見に基づいた中・高齢者とトレーニングの理論<br>第 11 回 科学的知見に基づいた中・高齢者とトレーニングの実際<br>第 12 回 中・高齢者のトレーニング処方（発表）<br>第 13 回 科学的知見に基づいた女性とトレーニングの理論<br>第 14 回 科学的知見に基づいた女性とトレーニングの実際<br>第 15 回 女性のトレーニング処方（発表）  |      |
| 事前学習の内容<br>学習上の注意 | 履修上の注意<br>予習：該当する内容について、参考書や文献などを熟読し、疑問点などを明確にして授業に臨むこと。<br>復習：授業内容を深めるとともに、不明確な内容については再度学習すること。<br>その他：授業には積極的な姿勢で参加すること。  |      |
| 本科目の<br>関連科目      | スポーツ心理学特論、スポーツコーチング特論、スポーツコーチング演習A、スポーツコーチング演習B   |      |
| テキスト              | 未定  |      |
| 参考文献              | NSCA 決定版「ストレングス&コンディショニング」ブックハウス・エイチディ 2002<br>ジェイ・ホフマン著「スポーツ生理学からみたスポーツトレーニング」大修館書店 2011<br>嶋木秀夫編「健康づくりのための運動の科学」化学同人 2013   |      |
| 成績評価方法<br>と基準     | 1. 対象ごとのトレーニング処方に関するレポート提出およびプレゼンテーション（30%）<br>2. 文献抄読（20%）<br>3. 定期試験による出題への知識・理解、さらに研究的思考力を（50%）<br>4. 3つの合計 100 点中 60 点で合格点とする。  |      |

□講義科目（専門科目）

|               |   |      |
|---------------|---|------|
| 科目名           | 環境生理学特論   | 2 単位 |
| 担当者           | 西村直記  |      |
| テーマ           | 種々環境下でのスポーツ時の生理機能変化を理解するとともに、指導者として活用できる実践力を養う  |      |
| 科目のねらい        | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① スポーツと環境 ② 高地トレーニング ③ 暑熱・寒冷環境 ④ 体温調節機能<br/>           ⑤ 熱中症</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           ヒトは様々な環境変化に応じて生理機能を変化させ、生体のホメオスタシスを維持している。本講義では、特にスポーツ時のパフォーマンスと密接に関わり合う高地環境および暑熱・寒冷環境に関する最新の研究内容を取り上げ、アスリートならびに一般人がこれらの環境下でスポーツを実施した際の生理機能の変化について学修するとともに、指導者として活用できる実践力を養う。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           1. 高地環境下でのスポーツ時の生体反応について理解し、説明することができる。<br/>           2. 暑熱・寒冷環境下でのスポーツ時の生体反応について理解し、説明することができる。<br/>           3. 体温調節機能とパフォーマンスとの関係について理解し、説明することができる。<br/>           4. 熱中症とその予防対策について理解し、説明することができる。</p> |      |
| 授業の進め方        | 第 1 回 スポーツと環境<br>第 2 回 高地環境下での生理機能変化<br>第 3 回 高地トレーニングの理論と実際<br>第 4 回 グループディスカッション（高地トレーニング）<br>第 5 回 自律性体温調節と行動性体温調節<br>第 6 回 寒冷環境下での生理機能変化<br>第 7 回 暑熱環境下での生理機能変化<br>第 8 回 寒冷・暑熱環境とパフォーマンス<br>第 9 回 短期暑熱順化と長期暑熱順化<br>第 10 回 グループディスカッション（寒冷・暑熱環境とパフォーマンス）<br>第 11 回 熱中症の病型と症状<br>第 12 回 熱中症予防対策 1：水分摂取<br>第 13 回 熱中症予防対策 2：身体冷却<br>第 14 回 グループディスカッション（熱中症対策）<br>第 15 回 微小重力環境下での生理機能変化   |      |
| 事前学習の内容学習上の注意 | <p>&lt;事前&gt;<br/>           予め次回の講義内容について、スポーツ生理学や生理学の参考書や論文などを用いて予習し、疑問点などを明確にして講義に臨む。</p> <p>&lt;事後&gt;<br/>           講義内容の理解を更に深めると共に、不明確な内容については再度自己学習する。</p>   |      |
| 本科目の関連科目      | スポーツ医学特論、身体運動学特論、実践トレーニング特論、障害者スポーツ実践特論   |      |
| テキスト          | 未定  |      |
| 参考文献          | Hall JE（著）石川義弘（監訳）：『ガイドン生理学』 ELSEVIER<br>McArdle WD：『Physiology: Nutrition, Energy, and Human Performance』 Wolters Kluwer   |      |
| 成績評価方法と基準     | 1. 講義毎のレポート提出（30%）<br>2. 論述試験（70%）  |      |

□講義科目（専門科目）

|                       |   |      |
|-----------------------|---|------|
| 科目名                   | スポーツ理学療法学特論   | 2 単位 |
| 担当者                   | 小林寛和  |      |
| テーマ                   | スポーツ理学療法は、スポーツに取り組む者を対象としたリコンディショニング、リハビリテーション、外傷予防等で活用されている。その基礎的理論と手法について学ぶ。  |      |
| 科目のねらい                | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① スポーツ外傷の発生機転、発生メカニズム      ② スポーツ動作<br/>           ③ リコンディショニング      ④ リハビリテーション      ⑤ 外傷予防</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           スポーツ外傷などにより、スポーツ活動に制約を受けている者への対応の方法と内容について学ぶ。スポーツ外傷の病態と要する評価や理学療法の内容と方法を知り、そこから、安全かつ早期のスポーツ復帰を目標とする対処の考え方と基本的手法の活用方法について理解を深める。スポーツ動作の運動学や動作観察についても内容に含め、外傷発生機転の分析や、スポーツ復帰のための運動療法に応用することも学習する。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           1. 代表的なスポーツ外傷（急性、慢性）の病態、発生機転・発生メカニズムを疾患ごとに説明できる。<br/>           2. スポーツ動作の捉え方について、その考え方と方法が説明できる。<br/>           3. リコンディショニング、リハビリテーション、外傷予防の概要について説明ができる。<br/>           4. 外傷後のスポーツ再開、スポーツ復帰に要する主要な実技が実施できる。<br/>           5. スポーツ外傷の予防について、基本的な考え方と方法が説明できる。</p> |      |
| 授業の進め方                | 第 1 回 スポーツ理学療法学総論、スポーツ理学療法の現状<br>第 2 回 リコンディショニング、リハビリテーションの概要<br>第 3 回 スポーツ動作観察・分析 1：動作観察・分析の基礎<br>第 4 回 スポーツ動作観察・分析 2：走、跳、投動作の観察・分析<br>第 5 回 膝外傷後のスポーツ理学療法 1：急性外傷後（術後例含む）<br>第 6 回 膝外傷後のスポーツ理学療法 2：慢性外傷後<br>第 7 回 足部・足関節外傷後のスポーツ理学療法 1：急性外傷後<br>第 8 回 足部・足関節外傷後のスポーツ理学療法 2：慢性外傷後<br>第 9 回 肩外傷後のスポーツ理学療法 1：急性外傷後（術後例含む）<br>第 10 回 肩外傷後のスポーツ理学療法 2：慢性外傷後<br>第 11 回 腰部外傷後のスポーツ理学療法 1：筋性腰痛<br>第 12 回 腰部外傷後のスポーツ理学療法 2：器質的疾患に起因する腰痛<br>第 13 回 スポーツ外傷の予防<br>第 14 回 スポーツ理学療法で用いるテーピング、足底挿板<br>第 15 回 まとめ   |      |
| 事前学習の内容<br>学習上の<br>注意 | <p>&lt;事前&gt;<br/>           授業の終了時に次回の内容を説明するので、その内容に沿って予習をする。（1時間）<br/>           &lt;事後&gt;<br/>           授業内容の復習をする。（1時間）</p>  |      |
| 本科目の<br>関連科目          | スポーツ医学特論、スポーツメンタルトレーニング特論   |      |
| テキスト                  | 特に指定しない。映写資料に基づいたレジュメを使用。   |      |
| 参考文献                  | 小林寛和（編集） アスリートのリハビリテーションとリコンディショニング（上巻）、（下巻） 文光堂  |      |
| 成績評価方法<br>と基準         | 期末試験（80%）、授業内での実技確認、レポート、課題等（20%）   |      |

□講義科目（専門科目）

|                       |   |     |
|-----------------------|---|-----|
| 科目名                   | スポーツ医学特論  | 2単位 |
| 担当者                   | 柿崎裕彦  |     |
| テーマ                   | スポーツ科学を専攻するにあたって知っておくべき医学的知識の習得   |     |
| 科目のねらい                | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① スポーツ医学(外科系) ② スポーツ医学(内科系) ③ スポーツ栄養学<br/>           ④ スポーツと視覚</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           スポーツ科学を専攻する者は、将来的には指導者として自立することが期待される。選手を指導するにあたって、選手各々の体調やその変化を把握し、外傷が生じた時の応急処置を理解・実践できることは、指導者として必須である。また、スポーツにおける視覚の関与を理解し、視覚がどのように運動パフォーマンスに結びついているのか理解する。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           1. スポーツ障害について理解し、説明することができる。<br/>           2. 熱中症について理解し、説明することができる。<br/>           3. よりよく運動するための栄養学を理解し、説明することができる。<br/>           4. スポーツにおける視覚の関与を理解し、説明することができる。</p> |     |
| 授業の進め方                | 第 1 回 人体解剖学・骨格系<br>第 2 回 人体解剖学・筋1（上肢・肩・体幹前面）<br>第 3 回 人体解剖学・筋2（下肢・股関節・体幹後面）<br>第 4 回 人体解剖学・神経系・循環系<br>第 5 回 人体解剖学・呼吸器系・内臓系・泌尿器系<br>第 6 回 人体解剖学・眼科系<br>第 7 回 スポーツ医学(外科系1：頭部・顔面・脊椎の外傷)<br>第 8 回 スポーツ医学(外科系2：上肢・肩の外傷)<br>第 9 回 スポーツ医学(外科系3：下肢・股関節の外傷)<br>第 10 回 スポーツ医学(内科系1：内科系疾患とスポーツ)<br>第 11 回 スポーツ医学(内科系2：熱中症)<br>第 12 回 スポーツ医学(女性、成長期、高齢者、障害者)<br>第 13 回 スポーツ栄養学（アミノ酸プールとしての筋と免疫系との関連）<br>第 14 回 スポーツ医学と視覚<br>第 15 回 総括   |     |
| 事前学習の内容<br>学習上の<br>注意 | <p>&lt;事前&gt;<br/>           スポーツ医学の参考書・文献等を用いて予習し、疑問点を明らかにしておく。</p> <p>&lt;事後&gt;<br/>           講義内容の理解を更に深めるため、不明確な内容に関しては、教員への質問や文献の検索等によって速やかに解決する。</p>  |     |
| 本科目の<br>関連科目          | 環境生理学特論、スポーツ理学療法学特論   |     |
| テキスト                  | 特に指定しない   |     |
| 参考文献                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツ医学検定 公式テキスト（2・3級） 一般社団法人日本スポーツ医学検定機構</li> <li>・基礎から学ぶ! スポーツ栄養学（基礎から学ぶ!スポーツシリーズ）鈴木 志保子</li> <li>・スポーツ眼科 A to Z (MB OCULISTA (オクリスタ)) 枝川 宏</li> <li>・分担解剖学 I、II、III</li> </ul>  |     |
| 成績評価方法<br>と基準         | 1. 講義毎のレポート提出（50%）<br>2. 筆記試験（50%）  |     |

□講義科目（専門科目）

|                   |   |     |
|-------------------|---|-----|
| 科目名               | スポーツ栄養学特論   | 2単位 |
| 担当者               | 海老根直之   |     |
| テーマ               | 栄養に関する科学的知見のスポーツ現場への応用方法を，実践例を交えて学修する。  |     |
| 科目のねらい            | <p>&lt;キーワード&gt;</p> <p>① 三大栄養素           ② 消化・吸収           ③ 競技特性           ④ 期分け</p> <p>⑤ エネルギー・バランス   ⑤ 栄養アセスメント</p> <p>&lt;内容の要約&gt;</p> <p>スポーツ栄養学特論では，競技力の向上を目的としたスポーツ選手の栄養素摂取や栄養管理の基礎と応用を学修する。さらに，社会的関心の高まりに応じ，非鍛錬者においての体力の保持・増進についての観点とも関連させながら，健康づくりのための運動と栄養の関連性についても学ぶ。具体的な内容としては，消化・吸収のメカニズムに始まる栄養学の基礎，身体活動量とエネルギー必要量について，身体組成について，水分やサプリメントの摂取法，体づくり・スタミナづくりのための食事法に代表される各種目的に応じた食事法などについて，最新の知見に踏み込んで学修する。</p> <p>スポーツ栄養学の分野は，とりわけスポーツ生理学，スポーツ生化学，スポーツ医学の分野と関連が深いので，各領域との学際的先端領域のテーマについても積極的に取り上げる。</p> <p>&lt;学習目標&gt;</p> <p>1. スポーツ選手が栄養学に根ざした体調管理や競技力向上を図る上で不可欠な栄養摂取法や栄養管理法が理解できる。</p> <p>2. スポーツ・運動と栄養学との関連トピックについて，質の高い情報を収集することができる。</p> <p>3. 生涯を通じた健康づくりのあり方について栄養学的側面から理解できる。</p> |     |
| 授業の進め方            | <p>第 1 回 栄養学の基本理念と意義：健康と栄養，消化と吸収のメカニズム</p> <p>第 2 回 栄養素の役割：栄養素の種類，栄養素の役割</p> <p>第 3 回 栄養素の役割（食品栄養学を含む）：食品の分類と各食品の特色</p> <p>第 4 回 栄養素の機能と代謝：糖質</p> <p>第 5 回 栄養素の機能と代謝：蛋白質</p> <p>第 6 回 栄養素の機能と代謝：脂質</p> <p>第 7 回 スポーツ選手の特異性：競技タイプ，トレーニングの期分けと栄養計画</p> <p>第 8 回 エネルギー・バランス：身体活動量とエネルギー必要量</p> <p>第 9 回 食事摂取基準</p> <p>第 10 回 身体組成と栄養</p> <p>第 11 回 栄養調査・食事アセスメントの実際</p> <p>第 12 回 運動中の水分補給と栄養素摂取</p> <p>第 13 回 身体（筋肉・骨）づくりと持久力向上</p> <p>第 14 回 サプリメントの利用と特殊成分</p> <p>第 15 回 まとめ（スポーツ科学分野における栄養学の意義）</p>  |     |
| 事前学習の内容<br>学習上の注意 | <p>&lt;事前&gt;</p> <p>講義内で質の高い討議が行えるよう，講義内容については，あらかじめテキストや参考書で学習してから参加すること（1時間）。</p> <p>&lt;事後&gt;</p> <p>授業で取り扱った内容については，元となっている文献を確認するなど，復習を行うことで理解を高めること（1時間）</p>  |     |
| 本科目の<br>関連科目      | 発育発達学特論，スポーツメンタルトレーニング特論，環境生理学特論，スポーツ医学特論   |     |
| テキスト              | 田口素子・樋口満編著『体育・スポーツ指導者と学生のためのスポーツ栄養学』（市村出版，2014年）<br>適宜，テキストを補完する印刷物を教室にて配布し，教材として使用する。  |     |
| 参考文献              | <p>・小林修平（編著）『アスリートのための栄養・食事ガイド』第3版（第一出版，2014年）</p> <p>・下村吉治『スポーツと健康の栄養学-第3版』（ナッブ，2011年）</p> <p>・トレーニング科学研究会『競技力向上のスポーツ栄養学』（朝倉書店，2001年）</p>  |     |
| 成績評価方法<br>と基準     | <p>平常点 50%：授業時の討議，質疑応答などの総合的評価</p> <p>期末筆記試験 50%：受講内容に関する学期末試験</p> <p>100点満点で60点以上を合格とする</p>  |     |

□講義科目（専門科目）

|                       |   |     |
|-----------------------|---|-----|
| 科目名                   | スポーツ哲学特論  | 2単位 |
| 担当者                   | 竹村瑞穂  |     |
| テーマ                   | スポーツとは何かという問いについて、哲学的思考をもとに自ら考える  |     |
| 科目のねらい                | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① スポーツ ② 競技スポーツ ③ 本質 ④ 性質 ⑤ 分析哲学<br/>           ⑥ 大陸合理論 ⑦ 身体教育</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           スポーツ哲学とは、スポーツとは何かという問いについて迫る学問分野である。換言すれば、スポーツの本質とは何かに迫ることがねらいである。しかし、その前提として、スポーツの本質とはなにか、という問いそのものに対する哲学的探究が求められる。そもそもスポーツに本質があるのかどうか、問いの設定の妥当性も含めて学習し、スポーツのエトス（内在的目的）や価値について理解を深める。そのために、考察の枠組みとなる哲学理論（分析哲学および大陸合理論）についても授業の中で学習する。<br/>           そのうえで、身体教育とスポーツの違い、スポーツと芸術の異同、eスポーツなどニュースポーツの概念把握などについて理解を深めていく。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           1. スポーツの定義について考えることが出来る。<br/>           2. スポーツの本質論・非本質論の立場について、哲学的視点から理解出来る。<br/>           3. スポーツとスポーツではないように思われる活動の異同について理解を深めることが出来る。<br/>           4. スポーツの目的と価値について理解し、説明することが出来る。</p> |     |
| 授業の進め方                | 第 1 回 オリエンテーション<br>第 2 回 スポーツ哲学史について<br>第 3 回 本質と性質の違いについて：アリストテレスの形而上学から<br>第 4 回 スポーツ本質論的立場について<br>第 5 回 スポーツ非本質論的立場について<br>第 6 回 分析哲学からみるスポーツ論<br>第 7 回 大陸合理論からみるスポーツ論<br>第 8 回 スポーツのルールについて<br>第 9 回 スポーツのエトスについて<br>第 10 回 スポーツの価値について<br>第 11 回 中間確認テスト<br>第 12 回 スポーツに関する応用哲学（1）競争の哲学<br>第 13 回 スポーツに関する応用哲学（2）オリンピックの哲学<br>第 14 回 スポーツに関する応用哲学（3）パラリンピックの哲学<br>第 15 回 スポーツに関する応用哲学（4）身体の哲学  |     |
| 事前学習の内容<br>学習上の<br>注意 | 事前学習：スポーツ概念に関するキーワードについて調べる（90分）<br>事後学習：スポーツのエトスと価値について資料をまとめる（90分）<br>適宜支持する予習を行い、能動的に授業に参画し、自ら考え、積極的に発言をすること   |     |
| 本科目の<br>関連科目          | スポーツインテグリティ特論   |     |
| テキスト                  | なし  |     |
| 参考文献                  | Cesar R.Torres (ed) The Bloomsbury companion to the Philosophy of sport. Bloomsbury.<br>友添秀則・岡出美則編著（2016）新版 教養としての体育原理. 大修館書店.  |     |
| 成績評価方法<br>と基準         | 論述試験 100%   |     |



□講義科目（専門科目）

|                   |   |     |
|-------------------|---|-----|
| 科目名               | スポーツ史特論   | 2単位 |
| 担当者               | 新井博   |     |
| テーマ               | 近代スポーツの誕生   |     |
| 科目のねらい            | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>① 近代スポーツ ② 産業革命 ③ イギリス ④ アメリカ ⑤ 日本</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>中世末のイギリスでは、地方の大土地所有者であるジェントリーたちが、フィールドスポーツと言われる狩や釣りなどのスポーツに興じていた。18世紀イギリスに起こった産業革命により、囲い込みにより農村部から都市部に移動した労働者たちが工場労働者となり、ヒマと金をもった新興ブルジョアジーが誕生し、ゴルフ、クリケット、ボートなどのスポーツに興じるようになった。それらが具体的な適用について検討する。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>1. イギリスのスポーツに興じる人々についての理解を深めることができる。<br/>2. 他に、アメリカ、日本の様子をとらえることができる。<br/>3. スポーツの誕生について歴史的背景、理論構造に関して知識を修得することができる。</p> |     |
| 授業の進め方            | <p>第1回 オリエンテーション<br/>第2回 中世の社会とスポーツ<br/>第3回 中世のイギリスでのスポーツ<br/>第4回 18世産業革命とスポーツの誕生<br/>第5回 19世紀のパブリックスクールでのスポーツの誕生<br/>第6回 1863年フットボール連盟の誕生<br/>第7回 1871年ラグビー連盟の誕生<br/>第8回 1880年以降のフットボールのプロ化<br/>第9回 各スポーツの組織化<br/>第10回 各スポーツの国際的な組織化<br/>第11回 アメリカでのスポーツの誕生<br/>第12回 アメリカでのスポーツの普及<br/>第13回 日本でのスポーツの導入と普及<br/>第14回 日本でのスポーツの発展<br/>第15回 まとめ</p>   |     |
| 事前学習の内容<br>学習上の注意 | シラバスに基づき、講義内容に関する予習を行い講義に臨むこと。提示したテーマについて、講義とプレゼンテーションを交えながら展開する。   |     |
| 本科目の<br>関連科目      | なし  |     |
| テキスト              | スポーツの歴史と文化  |     |
| 参考文献              | なし  |     |
| 成績評価方法<br>と基準     | プレゼンテーション 20%、事前課題レポート 30%、最終レポート 50%により総合評価し、60点以上を合格とする。  |     |

□講義科目（専門科目）

|                       |  |      |
|-----------------------|--|------|
| 科目名                   | スポーツ社会学特論  | 2 単位 |
| 担当者                   | 藤田紀昭   |      |
| テーマ                   | スポーツ界の様々な事象をスポーツ社会学の理論を手掛かりに読み解く   |      |
| 科目のねらい                | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① プレイ論 ② スポーツ的社会化論 ③ スポーツ近代化論 ④ 構造機能主義<br/>           ⑤ マルクス主義 ⑥ カルチュラルスタディーズ</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           本授業ではスポーツ界に生じている様々な事象を単に要因等を説明するだけでなく、各種理論を用いて理解し、その要因や課題解決に向けての手がかりを得られるようにする。まず初めにスポーツ社会学で用いられてきた各種理論（プレイ論、スポーツ的社会化論、スポーツ近代化論、構造機能主義、マルクス主義、カルチュラルスタディーズ）について理解し、これらを用いた所論を講読して理解を深めるさらにスポーツ事象について自ら読み解き議論する。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           1. スポーツ社会学で用いられている各種理論を理解し、説明することができる。<br/>           2. スポーツ界で生じている事象について適切な理論を用いて説明、理解することができる</p>            |      |
| 授業の進め方                | 第 1 回 オリエンテーション<br>第 2 回 スポーツ社会学理論の理解①プレイ論<br>第 3 回 スポーツ事象の理解と説明の方法①プレイ論を用いた所論の講読<br>第 4 回 スポーツ社会学理論の理解②スポーツ社会論<br>第 5 回 スポーツ事象の理解と説明の方法②スポーツ社会論を用いた所論の講読<br>第 6 回 スポーツ社会学理論の理解③スポーツ近代化論<br>第 7 回 スポーツ事象の理解と説明の方法③スポーツ近代化論を用いた所論の講読<br>第 8 回 スポーツ社会学理論の理解④構造機能主義<br>第 9 回 スポーツ事象の理解と説明の方法④構造機能主義を用いた所論の講読<br>第 10 回 スポーツ社会学理論の理解⑤マルクス主義<br>第 11 回 スポーツ事象の理解と説明の方法⑤マルクス主義を用いた所論の講読<br>第 12 回 スポーツ社会学理論の理解⑥カルチュラルスタディーズ<br>第 13 回 スポーツ事象の理解と説明の方法⑥カルチュラルスタディーズを用いた所論の講読<br>第 14 回 スポーツ事象の要因と理解の発表と議論<br>第 15 回 本授業のまとめ |      |
| 事前学習の内容<br>学習上の<br>注意 | <p>&lt;事前&gt;<br/>           授業の終了時に次回の内容を説明するので、その内容に沿って予習をする。（1時間）<br/>           &lt;事後&gt;<br/>           授業内容の復習をする。（1時間）</p>   |      |
| 本科目の<br>関連科目          | スポーツ史特論、スポーツ人類学特論、スポーツ哲学特論、スポーツ共生社会特論  |      |
| テキスト                  | 特に指定しない  |      |
| 参考文献                  | 井上俊・菊幸一編、2012、『よくわかるスポーツ文化論』ミネルヴァ書房<br>佐伯年詩雄監修・菊幸一、仲澤真編集、2006、『スポーツプロモーション論』<br>明和出版<br>スポーツ社会学会、2013『21 世紀のスポーツ社会学』創文企画   |      |
| 成績評価方法<br>と基準         | 期末試験 50%<br>授業内レポート、課題 50%<br>100 点満点で 60 点以上を合格とする  |      |

□講義科目（専門科目）

|                       |  |     |
|-----------------------|--|-----|
| 科目名                   | スポーツビジネス特論   | 2単位 |
| 担当者                   | 住田健  |     |
| テーマ                   | スポーツビジネスに関する諸問題を、マーケティングの理論を用いて解決するための手法を学修する  |     |
| 科目のねらい                | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① スポーツビジネス ② スポーツマーケティング ③ スポーツ消費者<br/>           ④ スポーツマーケティング戦略 ⑤ スポーツマーケティングリサーチ</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           現代のスポーツビジネスは、グローバル化、テクノロジーの進化に影響を受け急速に成長している産業である。そのような中、消費者のスポーツに対するニーズは多様化し、スポーツ事業に関わる現象も複雑になってきている。本特論では、現代のスポーツビジネスの課題をマーケティングの理論・手法を理解し、援用することで解決するための手法を身につけることを目的とする。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           1. 現代のスポーツビジネスの現状と課題について理解し、解決するための仮説を設定することができる。<br/>           2. スポーツマーケティング理論、重要なトピックについて理解し、説明することができる。<br/>           3. スポーツビジネスの課題を解決するために必要なリサーチ手法について理解し、説明することができる。<br/>           4. リサーチから得られた結果をもとに、マーケティングプランを立案することができる。</p> |     |
| 授業の進め方                | 第 1 回 オリエンテーション<br>第 2 回 スポーツビジネス概要：スポーツビジネスの現状と課題の理解<br>第 3 回 スポーツマーケティングの基礎理論①：マーケティングとはなにか<br>第 4 回 スポーツマーケティングの基礎理論②：一般財とサービス財の違い<br>第 5 回 スポーツマーケティングの基礎理論③：スポーツプロダクトの特性<br>第 6 回 スポーツ消費者行動の基礎理論①：スポーツ消費者の動機と価値判断<br>第 7 回 スポーツ消費者行動の基礎理論②：スポーツ消費者の情報接触、注意、知覚<br>第 8 回 スポーツ消費者行動の基礎理論③：スポーツ消費者の意思決定プロセス<br>第 9 回 スポーツ消費者行動の基礎理論④：スポーツ消費者のサービス評価と満足度<br>第 10 回 スポーツマーケティングの戦略①：マーケット・セグメンテーション<br>第 11 回 スポーツマーケティングの戦略②：代替品とポジショニング<br>第 12 回 スポーツマーケティングの戦略③：マーケティング戦略プラン<br>第 13 回 スポーツマーケティングリサーチ①：仮説構築と検証の手続き<br>第 14 回 スポーツマーケティングリサーチ②：調査用紙作成のための基礎知識<br>第 15 回 スポーツマーケティングリサーチ③：調査用紙作成の実践                |     |
| 事前学習の内容<br>学習上の<br>注意 | 事前学習：各単元の前週に文献資料を配布するので、読んでおくこと（60分）<br>事後学習：講義で配布する資料と文献資料を読み返し単元の理解に努めること（90分）<br>スポーツビジネス業界は日々発展するため、国内外のスポーツビジネスの動向やスポーツ産業の情報を常に集めておくこと  |     |
| 本科目の<br>関連科目          | スポーツマネジメント特論   |     |
| テキスト                  | 特に指定しない  |     |
| 参考文献                  | 平田竹男（2017）スポーツビジネス最強の教科書（第2版）. 東洋経済.<br>森岡毅・今西聖貴（2016）確率志向の戦略論. 角川書店.<br>川上昌直（2013）儲ける仕組みをつくるフレームワークの教科書. かんき出版.<br>原田宗彦・藤本淳也・松岡宏高（2018）スポーツマーケティング（改訂版）. 大修館書店.   |     |
| 成績評価方法<br>と基準         | スポーツ組織が抱える課題を解決するための企画書を作成し、提出をしてもらう。企画書は、課題の要因に関する仮説設定パート（25点）、仮説を検証するための質問用紙（25点）、想定される結果から策定されるマーケティングプラン（50点）の三部構成で評価を行う。企画書全体を100点とし、60点以上を合格とする  |     |

□講義科目（専門科目）

|                       |  |      |
|-----------------------|--|------|
| 科目名                   | スポーツマネジメント特論   | 2 単位 |
| 担当者                   | 住田健  |      |
| テーマ                   | スポーツ組織が抱える課題を解決するための思考とその実践手法を学修する   |      |
| 科目のねらい                | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① マネジメント ② 市場環境 ③ スポーツ組織 ④ スポーツファイナンス<br/>           ⑤ スポーツ法</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           簡潔に言えば、スポーツマネジメントとは、スポーツ組織が持つヒト・モノ・カネ・情報の経営資源を効率的に活用し、スポーツの付加価値を生み出す作業のプロセスである。そのため、スポーツマネジメントが対処とする組織の範囲は、地域の市民クラブから世界を代表するプロスポーツクラブにまで渡る。本特論では、現代のスポーツ組織が抱える課題を、市場環境と組織のマネジメントの観点から学修する。また、スポーツマネジメントを深く理解するために、スポーツマネジメントに必要な財務知識と法知識についても取り上げる。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           1. 現代のスポーツマネジメントの現状と課題について理解し、説明することができる。<br/>           2. スポーツマネジメントにおける重要な理論・概念について理解し、説明することができる。<br/>           3. 実践現場の課題を解決するための手法を生み出すために、スポーツマネジメントの学術的知見を還元することができる。</p> |      |
| 授業の進め方                | 第 1 回 オリエンテーション<br>第 2 回 スポーツマネジメント概要：スポーツマネジメントの現状と課題の理解<br>第 3 回 スポーツマネジメントの市場環境①：スポーツ組織の競争戦略<br>第 4 回 スポーツマネジメントの市場環境②：スポーツ組織の差別化戦略<br>第 5 回 スポーツマネジメントの市場環境③：市場における競争優位<br>第 6 回 スポーツマネジメントの市場環境④：多角化と事業ポートフォリオ<br>第 7 回 スポーツ組織のマネジメント①：スポーツ組織と人的資源<br>第 8 回 スポーツ組織のマネジメント②：スポーツ組織の構造<br>第 9 回 スポーツ組織のマネジメント③：スポーツ組織計画と管理<br>第 10 回 スポーツ組織のマネジメント④：スポーツ組織に求められるリーダーシップ<br>第 11 回 スポーツ組織のマネジメント⑤：スポーツ組織の理念と組織文化<br>第 12 回 スポーツ組織のファイナンス①：スポーツファイナンスの特性<br>第 13 回 スポーツ組織のファイナンス②：ファイナンス思考によるスポーツマネジメント<br>第 14 回 スポーツマネジメントの法知識①：スポーツ組織の設立と関連する法律<br>第 15 回 スポーツマネジメントの法知識②：スポーツビジネスと関連する法律              |      |
| 事前学習の内容<br>学習上の<br>注意 | 事前学習：各単元の前週に文献資料を配布するので、読んでおくこと（60分）<br>事後学習：講義で配布する資料と文献資料を読み返し単元の理解に努めること（90分）<br>スポーツマネジメントを深く理解するために、スポーツマネジメントに関する文献だけではなく、一般の経営学に関する文献も積極的に読むことを推奨する   |      |
| 本科目の<br>関連科目          | スポーツビジネス特論   |      |
| テキスト                  | 特に指定しない  |      |
| 参考文献                  | 原田宗彦・小笠原悦子（2015）スポーツマネジメント（改訂版）. 大修館書店.<br>伊丹敬之・加護野忠男（2003）.ゼミナール経営学入門（第3版）. 日本経済新聞出版社.<br>琴坂将広（2018）経営戦略原論. 東洋経済新報社.<br>入山章栄（2019）世界標準の経営理論. ダイヤモンド社.<br>武藤泰明（2014）スポーツの資金と財務. 大修館書店.<br>朝倉祐介（2018）ファイナンス思考. ダイヤモンド社.   |      |
| 成績評価方法<br>と基準         | スポーツマネジメントの市場環境に関するレポート（25点）<br>スポーツ組織のマネジメントに関するレポート（25点）<br>スポーツ組織が抱えるマネジメント課題解決プランに関するレポート（50点）<br>全てのレポートを合わせて100点とし、60点以上で合格とする   |      |

□講義科目（専門科目）

|                       |   |     |
|-----------------------|---|-----|
| 科目名                   | スポーツ人類学特論   | 2単位 |
| 担当者                   | 吉田文久  |     |
| テーマ                   | スポーツの人類学的研究の成果とその文化的・社会的貢献について  |     |
| 科目のねらい                | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① 人間 ② 多文化共生 ③ 文化的特性 ④ 行為主体 ⑤ フィールドワーク</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           世界各地には、近代化しないままの形で様々な土着の伝統スポーツが存続し、その土地に根差す文化として、人々の生活と一体化し、そこには、人間が生きる楽しみを創造する知恵が盛り込まれている。彼らが行為主体（Agent）として、その伝統スポーツを存続・継承する姿からは、現代におけるスポーツの主体者形成の問題はじめ、スポーツ現場で生じている課題を解決したり、地域の諸課題を解決するためのヒントを得ることができる。本科目では、スポーツ人類学のこれまでの研究成果及び研究方法を分析・検討し、自らがフィールドに出て調査し、記述する作業に取り組む。その作業をもとに、人間にとってのスポーツの意味、スポーツのもつ文化的価値について考察し、多文化共生の視点から主体性をもってスポーツの発展に寄与する行動について各自が提案する内容を集団で検討し、改めて自身の役割、社会貢献の仕方について確認することをねらいとする。</p> <p>&lt;学習目標&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 伝統スポーツがどのように伝承され、そのために、どのような工夫や努力がされてきたか民族誌を解説し、説明することができる。</li> <li>2. スポーツ人類学研究の成果を批判的に分析し、自身が取り組む研究の目的・内容・方法について提示・説明することができる。</li> <li>3. スポーツの行為主体形成の課題を理解し、その課題解決に向けて行動に移す方法を提示し、集団検討に基づいてフィードバックすることができる。</li> <li>4. 多文化共生に向けてスポーツ人類学がどのように貢献できるか理解し、その具体的な行動方法を提示することができる。</li> </ol> |     |
| 授業の進め方                | 第 1 回 スポーツ人類学研究の意義とその歴史 <学問論><br>第 2 回 文化人類学との接点 <他分野との接点><br>第 3 回 これまでのスポーツ人類学の研究テーマとその成果 <研究成果><br>第 4 回 スポーツ人類学研究の成果に基づくスポーツの文化的特性（意義）とは（事例 1）<日本の伝統スポーツ><br>第 5 回 スポーツ人類学研究の成果に基づくスポーツの文化的特性（意義）とは（事例 2）<世界の伝統スポーツ><br>第 6 回 スポーツ人類学の研究方法としての文献研究 <史料発掘><br>第 7 回 スポーツ人類学の研究方法としてのフィールドワークとは(1) <参与観察><br>第 8 回 スポーツ人類学の研究方法としてのフィールドワークとは(2) <フィールドノート><br>第 9 回 民族誌的記述方法とは <目的・内容・方法><br>第 10 回 各自の設定した研究対象に関する調査(1) <事前打合せ（対象者理解）><br>第 11 回 各自の設定した研究対象に関する調査(2) <インタビューの実施><br>第 12 回 各自の設定した研究対象に関する調査(3) <インタビューの補足><br>第 13 回 調査の整理 <整理><br>第 14 回 研究成果の発表 <発表><br>第 15 回 スポーツ人類学の研究成果の文化的・社会的貢献の可能性 <研究成果の貢献>   |     |
| 事前学習の内容<br>学習上の<br>注意 | 予習：該当する内容について、参考書などを熟読し、疑問点などを明確にして授業に臨むこと。<br>復習：授業内容を深めるとともに、不明確な内容については再度学習すること。<br>その他：授業には積極的な姿勢で参加すること。   |     |
| 本科目の<br>関連科目          | スポーツ科学研究方法特論、スポーツ哲学特論、スポーツ史特論、スポーツフィールドスタディ演習A、スポーツフィールドスタディ演習B   |     |
| テキスト                  | 『フットボールの原点』吉田文久著、創文企画、2014  |     |
| 参考文献                  | 『スポーツ人類学入門』、K. ブランチャード、A. チェスカ著：大林・寒川訳、大修館書店、1988<br>『スポーツ人類学』宇佐美隆憲著、明和出版、2004<br>『教養としてのスポーツ人類学』寒川恒夫（編著）、大修館書店、2004<br>『遊びの人類学』亀井伸孝著、昭和堂、2013  |     |
| 成績評価方法<br>と基準         | プレゼンテーション 20%、課題レポート 30%、最終レポート 50%により総合評価し、60 点以上を合格とする。   |     |

□講義科目（専門科目）

|                   |  |      |
|-------------------|--|------|
| 科目名               | 保健体育科教育特論  | 2 単位 |
| 担当者               | 吉田文久、白石龍生  |      |
| テーマ               | 保健・体育授業の授業づくり及び授業研究の理論及び実践   |      |
| 科目のねらい            | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① 授業づくり ② 授業研究 ③ インクルーシブ体育 ④ PDCA サイクル<br/>           ⑤ 教科の存立基盤</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           教育実習はじめ教育現場での授業実践を経験し、また参観してきたことをもとに、保健体育科教育関係の雑誌、学会発表や論文における体育実践の現状、研究成果や課題を整理し、現場に直結し、PDCA サイクルに基づく保健及び体育の授業づくりについて検討する。ここでは、異質協同、インクルーシブ体育を土台として、生徒の多様性に的確に対応できる体育教師の資質を身につけ、さらに、保健体育という教科の存立基盤を明らかにする議論を含める。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           1. 教育現場の保健及び体育実践の成果と課題を雑誌、論文を読み解き、説明することができる。<br/>           2. 教育現場における実践に直結する保健及び体育の授業づくり、授業研究の高度な専門的知識を身につけることができる。<br/>           3. 諸外国の取り組みを含め、保健及び体育実践におけるこれまでのインクルーシブ体育の実践の成果と課題について説明でき、これからの在り方を提示することができる。<br/>           4. 保健体育が教科として位置づく教科固有の価値について説明することができる。<br/>           5. 体育科教育、保健科教育及び安全教育の連携について理解し、説明することができる。</p> |      |
| 授業の進め方            | 第 1 回 オリエンテーション（これまでの保健及び体育の授業実践経験の振り返り）<br><担当：白石・吉田><br>第 2 回 体育実践の現状と課題Ⅰ（体育科教育関係の雑誌論文、実践報告に基づいて）<br><担当：吉田><br>第 3 回 体育実践の現状と課題Ⅱ（体育科教育関係の学会誌論文に基づいて）<br><担当：吉田><br>第 4 回 体育におけるカリキュラム論Ⅰ（日本の学習指導要領の変遷と改訂の意図）<br><担当：吉田><br>第 5 回 体育におけるカリキュラム論Ⅱ（イギリスのナショナルカリキュラム）<br><担当：吉田><br>第 6 回 インクルーシブ体育の現状と課題Ⅰ（日本）<担当：吉田><br>第 7 回 インクルーシブ体育の現状と課題Ⅱ（海外）<担当：吉田><br>第 8 回 体育における教材づくり、教材開発研究の可能性と問題点<担当：吉田><br>第 9 回 体育における PDCA サイクルの理解と実践<担当：吉田><br>第 10 回 体育の教科としての存立の根拠の議論<担当：吉田><br>第 11 回 新しい時代に対応できる安全教育の確立<担当：白石><br>第 12 回 保健科教育及び安全教育に関する教材開発<担当：白石><br>第 13 回 アクティブラーニングを生かした保健科教育の実践<担当：白石><br>第 14 回 保健科教育の授業評価法<担当：白石><br>第 15 回 まとめ（成果のプレゼンテーション）<担当：白石・吉田>   |      |
| 事前学習の内容<br>学習上の注意 | 予習：該当する内容について、参考書などを熟読し、疑問点などを明確にして授業に臨むこと。<br>復習：授業内容を深めるとともに、不明確な内容については再度学習すること。<br>その他：授業には積極的な姿勢で参加すること。  |      |
| 本科目の<br>関連科目      | スポーツフィールドスタディ演習A   |      |
| テキスト              | 『中学校及び高等学校学習指導要領解説保健体育編』（平成 29 年、平成 30 年）  |      |
| 参考文献              | 『体育科教育学への探求』（竹田、高橋、岡出編著）大修館書店、1997 年<br>『体育科教育学の現在』（岡出、松田、近藤他編集）創文企画、2015 年<br>『保健科教育法入門』（日本保健科教育学会）大修館書店、2017 年<br>『学校保健実務必携』（学校保健・安全実務研究会）第一法規、2017 年  |      |
| 成績評価方法<br>と基準     | プレゼンテーション 20%、課題レポート 30%、最終レポート 50%により総合評価し、60 点以上を合格とする。  |      |

□演習科目（展開科目）

|                   |   |      |
|-------------------|---|------|
| 科目名               | スポーツコーチング演習 A   | 2 単位 |
| 担当者               | 荒木雅信、山本真史   |      |
| テーマ               | コーチ科学へのスポーツ心理学の現場的活用  |      |
| 科目のねらい            | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① コーチ科学      ② スポーツメンタルトレーニング (SMT)      ③ 運動制御・運動学習<br/>           ④ 認知</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           コーチ科学におけるスポーツ心理学の現場的活用に関する最新の知見を概観し、当該領域の動向に関する理解を深め、その現場的活用法を理解する。主に、次の2つのテーマに焦点を当てて実験実習を展開し、コーチ科学におけるスポーツ心理学の立場と活用の可能性について展望し理解を深める。<br/>           1) 運動制御と運動学習、認知に関する実験法とその現場的活用と評価法について実験実習を通して理解する<br/>           2) SMT 講習会の企画および実施に参加して、各セッションのアシスタントをして SMT の技法と評価を理解する<br/>           ここで行う実験実習（運動学習、運動認知）では、情動・感情の働きについても検討を行う。また本演習は日本スポーツ心理学会認定 SMT 指導士資格の申請に必要な単位数に換算される。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           コーチ科学におけるスポーツ心理学の立場と活用の可能性についての理解を深めると共に SMT に必要な技法を修得し、指導現場で活かすことができる。</p> |      |
| 授業の進め方            | 第 1 回 コーチ科学でのスポーツ心理学の動向のレビュー<br>第 2 回 スポーツコーチング実習①（スポーツ心理学実験実習；運動制御）<br>第 3 回 スポーツコーチング実習②（スポーツ心理学実験実習；運動学習）<br>第 4 回 スポーツコーチング実習③（スポーツ心理学実験実習；運動認知）<br>第 5 回 スポーツコーチング実習④（SMT 実習①；自己分析法）<br>第 6 回 スポーツコーチング実習⑤（SMT 実習②；目標設定技法）<br>第 7 回 スポーツコーチング実習⑥（SMT 実習③；思考法）<br>第 8 回 スポーツコーチング実習⑦（SMT 実習④；リラクゼーション技法Ⅰ呼吸法、弛緩法）<br>第 9 回 スポーツコーチング実習⑧（SMT 実習⑤；リラクゼーション技法Ⅱ自律訓練法）<br>第 10 回 スポーツコーチング実習⑨（SMT 実習⑥；イメージ技法）<br>第 11 回 スポーツコーチング実習⑩（SMT 実習⑦；バイオフィードバック技法）<br>第 12 回 スポーツコーチング実習⑪（SMT 実習⑧；チームビルディング）<br>第 13 回 スポーツコーチング実習⑫（SMT 実習⑨；カウンセリング技法）<br>第 14 回 スポーツコーチング実習⑬（SMT 実習⑩；事例検討）<br>第 15 回 総括的討議（振り返り）   |      |
| 事前学習の内容<br>学習上の注意 | 事前に配布する実習ノートの内容（実習①－⑬）を予習して講義に臨むこと。授業は講義と実習を交えておこない最後に振り返りのためのプレゼンテーションを行う。授業終了後は、振り返りの内容のポイントを実習ノートの自己評価欄に記載しておくこと。  |      |
| 本科目の<br>関連科目      | スポーツ心理学特論、スポーツメンタルトレーニング特論、身体運動学特論  |      |
| テキスト              | 特に指定しないが、「実習ノート」を配布する   |      |
| 参考文献              | Routledge Handbook of Sport Coaching, Potrac, P et.al, (ed.) Routledge, London and New York, 2013., 樋口・森岡（共著）「身体運動学」三輪書店（2008）., 手塚洋介「感情の精神生理学」ナカニシヤ出版（2018）., 島沢優子「世界を獲るノート」株式会社カンゼン（2019）., 樋口「運動支援の心理学」三輪書店（2013）  |      |
| 成績評価方法<br>と基準     | 授業におけるプレゼンテーション（30%）、テーマ毎の課題レポート（70%）により総合的に評価し、60 点以上を合格とする。   |      |

□演習科目（展開科目）

|                         |   |      |
|-------------------------|---|------|
| 科目名                     | スポーツコーチング演習 B   | 2 単位 |
| 担当者                     | 三井利仁、山根真紀   |      |
| テーマ                     | 科学的知見に基づいたスポーツや運動の指導の理論と実践  |      |
| 科目のねらい                  | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① ニーズ分析 ② 指導法 ③ ウォーミングアップとクールダウン<br/>           ④ 簡易動作分析法 ⑤ 現場での活用</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           前半は、学士過程で学んだ基礎的な理論、知識、技能を土台として、スポーツ現場に求められているニーズを的確に把握し、そのためのサポートや指導を実践するための方法論を学ぶ。特に全体に共通する指導理論、具体的には科学的なウォーミングアップとクールダウン、IT 機器を活用した動作分析方法などの理解を深めるとともに、専門とする 1 種目については、初心者から中級者レベルまで指導できるスキルを学修する。後半は、それらの専門的知識および指導能力をスポーツ現場で実践し、高度な指導力を身につける。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           1. スポーツ現場の多様なニーズを分析する手法を習得している。<br/>           2. 種目や対象に応じた科学的なウォーミングアップやクールダウンを指導できる<br/>           3. スマートフォンやタブレットなど IT 機器を用いて、簡易な動作分析ができる<br/>           4. スポーツ現場で、個々のニーズに応じた運動やスポーツの支援・指導できる。</p> |      |
| 授業の進め方                  | 第 1 回 オリエンテーション<br>第 2 回 ニーズ分析と基礎的指導理論<br>第 3 回 ウォーミングアップとクールダウン①（ストレッチング）<br>第 4 回 ウォーミングアップとクールダウン②（動きづくりのトレーニング）<br>第 5 回 現場で行う動作分析①<br>第 6 回 現場で行う動作分析②<br>第 7 回 種目に応じた指導法と指導案の作成①<br>第 8 回 種目に応じた指導法と指導案の作成②<br>第 9 回 スポーツ現場指導実践①<br>第 10 回 スポーツ現場指導実践②<br>第 11 回 スポーツ現場指導実践③<br>第 12 回 スポーツ現場指導実践④<br>第 13 回 スポーツ現場指導実践⑤<br>第 14 回 報告会①（プレゼンテーションとディスカッション）<br>第 15 回 報告会②（プレゼンテーションとディスカッション）  |      |
| 事前学習の内容<br>内容学習上の<br>注意 | 履修上の注意<br>予習：該当する内容について、参考書や文献などを熟読し、疑問点などを明確にして授業に臨むこと。<br>復習：授業内容を深めるとともに、不明確な内容については再度学習すること。<br>その他：現場指導の際には、事前に指導案を作成し、事後に総括すること。  |      |
| 本科目の<br>関連科目            | スポーツ心理学特論、スポーツコーチング特論、実践トレーニング特論  |      |
| テキスト                    | 未定  |      |
| 参考文献                    | 深代千之「身体と動きで学ぶスポーツ科学：運動生理学とバイオメカニクスがパフォーマンスを変える」東京大学出版会 2018<br>金子 公有「スポーツ・バイオメカニクス入門—絵で見る講義ノート」杏林書院；第 3 版（2006/04）<br>ゴードン ロバートソン「身体運動のバイオメカニクス研究法」大修館書店 2008   |      |
| 成績評価方法<br>と基準           | 1. 科学的な指導方法に関するレポート提出（30%）<br>2. スポーツ現場指導のための指導案及び総括（50%）<br>3. スポーツ指導現場実践報告会でのプレゼンテーション（20%）<br>4. 3つの合計 100 点中 60 点で合格点とする。   |      |



□演習科目（展開科目）

|                       |  |     |
|-----------------------|--|-----|
| 科目名                   | スポーツフィールドスタディ演習A   | 2単位 |
| 担当者                   | 新井博、吉田文久   |     |
| テーマ                   | スポーツにかかわる現場（学校）において高度専門職業人としての実践力を身につける  |     |
| 科目のねらい                | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① 高度専門職業人 ② 実践力 ③ 学校 ④ スポーツ支援者</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           本授業では、学校における体育指導についての高度な専門的理論、知識、技能を獲得することを目的としている。地域の小学校、中学校または高等学校をフィールドスタディーの場として設定し、学校現場における課題に真摯に取り組むとともに高い教授技術を身につける。具体的活動としては、生徒および指導者の行動の観察、指導の補助、自らによる実践などに取り組み、学校現場で取り組まれているスポーツ活動の実態について学ぶとともに、見出せる課題解決に向けた提案を行い、高度専門職業人としての実践力を身につける。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           1. 学校のスポーツ活動について実態と課題について説明することができる。<br/>           2. 学校のスポーツ活動の組織・運営について理解し、支援に取り組むことができる。<br/>           3. 学校のスポーツ活動のもつ課題に対してその対応策や解決策を提案することができる。</p>   |     |
| 授業の進め方                | <p>第 1 回 スポーツフィールドスタディ（学校）を行う組織を知る &lt;学校組織の理解&gt;<br/>           第 2 回 スポーツフィールドスタディ 現場での目的と課題の確認 &lt;研究の目的&gt;<br/>           第 3 回 スポーツフィールドスタディ 学校スポーツの活動の内容について知る<br/>           （観察① 教材づくり「体育」）<br/>           第 4 回 スポーツフィールドスタディ 学校スポーツの活動の内容について知る<br/>           （観察② 教材づくり「保健」）<br/>           第 5 回 スポーツフィールドスタディ 学校スポーツの活動の内容について知る<br/>           （観察③ 部活動）<br/>           第 6 回 スポーツフィールドスタディ 学校スポーツの活動の内容について知る<br/>           （観察④ 行事）<br/>           第 7 回 スポーツフィールドスタディ 学校スポーツの活動の内容について知る<br/>           （補助① 教材づくり「体育」）<br/>           第 8 回 スポーツフィールドスタディ 学校スポーツの活動の内容について知る<br/>           （補助② 教材づくり「保健」）<br/>           第 9 回 スポーツフィールドスタディ 学校スポーツの活動の内容について知る<br/>           （補助③ 部活動）<br/>           第 10 回 スポーツフィールドスタディ 学校スポーツの活動の内容について知る<br/>           （補助④ 行事）<br/>           第 11 回 指導案の作成<br/>           第 12 回 スポーツフィールドスタディ 学校スポーツの活動の内容について知る<br/>           （実践①「体育」）<br/>           第 13 回 スポーツフィールドスタディ 学校スポーツの活動の内容について知る<br/>           （実践②「保健」）<br/>           第 14 回 スポーツフィールドスタディ 学校スポーツの活動の内容について知る<br/>           （実践③ 部活動）<br/>           第 15 回 スポーツフィールドスタディの報告書を作成し、発表する。</p> |     |
| 事前学習の内容<br>学習上の<br>注意 | <p>&lt;事前&gt;<br/>           授業の終了時に次回の内容を説明するので、その内容に沿って予習をする。（1時間）<br/>           &lt;事後&gt;<br/>           授業の内容を復習する。（1時間）</p>   |     |
| 本科目の<br>関連科目          | スポーツ共生社会特論、スポーツフィールドスタディ演習B  |     |
| テキスト                  | 特に、指定しない。  |     |
| 参考文献                  | <p>「中学校・高等学校学習指導要領解説保健体育科編」（文部科学省）<br/>           「運動部活動の戦後と現在」（中澤篤史著）<br/>           「運動部活動の教育学入門」（神谷拓著）</p>  |     |
| 成績評価方法<br>と基準         | <p>スポーツフィールドスタディノート（50%）<br/>           まとめのレポート（50%）</p>  |     |

□演習科目（展開科目）

|                   |   |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
|-------------------|---|--|-----|---|-----------------------|-----|---------------------------|-----|---|-------------------------------------|-----|-----|-----|-----|---|---------------------------------------|-----|-----|------|---|--|------|------|------|------|------|---------------------------|
| 科目名               | スポーツフィールドスタディ演習B  | 2単位  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 担当者               | 藤田紀昭、住田健  |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| テーマ               | スポーツに関わる現場（各種スポーツ競技団体や各種スポーツ協会等）において高度専門職業人としての実践力を身につける  |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 科目のねらい            | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① 高度専門職業人    ② 実践力    ③ スポーツ競技団体    ④ スポーツ協会<br/>           ⑤ スポーツ支援組織</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           本授業ではスポーツに関わる各種団体（全国レベルのスポーツ協会、地域のスポーツ協会、スポーツ支援団体等）においてスタッフとして関わり、わが国のスポーツ関連団体の実態について学ぶとともに、各組織における課題解決に向けた提案を行い、高度専門職業人としての実践力を身につける。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           1. スポーツ関連組織の実態と課題について説明することができる。<br/>           2. スポーツ関連組織の事業運営、組織運営に貢献することができる。<br/>           3. スポーツ関連組織の持つ課題に対してその対応策や解決策を提案することができる。</p>   |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 授業の進め方            | <table border="0"> <tr> <td>第1回</td> <td rowspan="2">}</td> <td>スポーツフィールドスタディを行う組織を知る</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td>スポーツフィールドスタディ現場での目的と課題の確認</td> </tr> <tr> <td>第3回</td> <td rowspan="4">}</td> <td rowspan="4">スポーツフィールドスタディ①<br/>スポーツ関連組織の運営について知る</td> </tr> <tr> <td>第4回</td> </tr> <tr> <td>第5回</td> </tr> <tr> <td>第6回</td> </tr> <tr> <td>第7回</td> <td rowspan="3">}</td> <td rowspan="3">スポーツフィールドスタディ②<br/>スポーツ関連組織の事業内容について知る</td> </tr> <tr> <td>第8回</td> </tr> <tr> <td>第9回</td> </tr> <tr> <td>第10回</td> <td rowspan="5">}</td> <td rowspan="5">スポーツフィールドスタディ③<br/>スポーツ関連組織の課題について知り、対応及び解決策を提案する</td> </tr> <tr> <td>第11回</td> </tr> <tr> <td>第12回</td> </tr> <tr> <td>第13回</td> </tr> <tr> <td>第14回</td> </tr> <tr> <td>第15回</td> <td>スポーツフィールドスタディ報告書を作成し、発表する</td> </tr> </table> |  | 第1回 | } | スポーツフィールドスタディを行う組織を知る | 第2回 | スポーツフィールドスタディ現場での目的と課題の確認 | 第3回 | } | スポーツフィールドスタディ①<br>スポーツ関連組織の運営について知る | 第4回 | 第5回 | 第6回 | 第7回 | } | スポーツフィールドスタディ②<br>スポーツ関連組織の事業内容について知る | 第8回 | 第9回 | 第10回 | } | スポーツフィールドスタディ③<br>スポーツ関連組織の課題について知り、対応及び解決策を提案する | 第11回 | 第12回 | 第13回 | 第14回 | 第15回 | スポーツフィールドスタディ報告書を作成し、発表する |
| 第1回               | }   | スポーツフィールドスタディを行う組織を知る                            |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 第2回               |   | スポーツフィールドスタディ現場での目的と課題の確認                        |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 第3回               | }   | スポーツフィールドスタディ①<br>スポーツ関連組織の運営について知る              |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 第4回               |   |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 第5回               |   |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 第6回               |   |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 第7回               | }   | スポーツフィールドスタディ②<br>スポーツ関連組織の事業内容について知る            |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 第8回               |   |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 第9回               |   |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 第10回              | }   | スポーツフィールドスタディ③<br>スポーツ関連組織の課題について知り、対応及び解決策を提案する |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 第11回              |   |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 第12回              |   |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 第13回              |   |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 第14回              |   |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 第15回              | スポーツフィールドスタディ報告書を作成し、発表する   |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 事前学習の内容<br>学習上の注意 | <p>&lt;事前&gt;<br/>           授業の終了時に次回の内容を説明するので、その内容に沿って予習をする。（1時間）</p> <p>&lt;事後&gt;<br/>           授業内容の復習をする。（1時間）</p>  |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 本科目の関連科目          | スポーツ科学研究方法特論、スポーツ科学研究Ⅰ、スポーツ科学研究Ⅱ  |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| テキスト              | 特に指定しない   |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 参考文献              | 授業時に示す  |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |
| 成績評価方法と基準         | スポーツフィールドスタディノート（50%）<br>まとめのレポート（50%）  |  |     |   |                       |     |                           |     |   |                                     |     |     |     |     |   |                                       |     |     |      |   |  |      |      |      |      |      |                           |

□演習科目（研究指導科目）

|        |  |      |
|--------|--|------|
| 科目名    | スポーツ科学研究 I   | 2 単位 |
| 担当者    | 新井博、荒木雅信、白石龍生、藤田紀昭、吉田文久、小林寛和、三井利仁、住田健、竹村瑞穂、西村直記、山根真紀、山本真史  |      |
| テーマ    | 適切な研究計画を立てる  |      |
| 科目のねらい | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① 研究計画 ② 先行研究の検討 ③ 研究倫理 ④ 研究フレーム<br/>           ⑤ 研究の目的と意義</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           本授業では適切な研究計画の作成に向けて、先行研究の件等、研究目的と意義の確認、研究フレームの検討、研究倫理審査に向けた準備を行う。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           1. 先行研究の検討をベースに修士論文の目的を説明することができる。<br/>           2. 修士論文の学術的意義及び社会的意義について説明することができる。<br/>           3. 適切な研究倫理申請書作成に向けた準備をすることができる。<br/>           4. 修士論文の適切な研究フレームについて説明することができる。<br/>           5. 修士論文の適切な研究計画書を作成することができる。</p> <p>担当教員の研究指導分野次のとおりである。いずれにおいても研究目的を明確にし、適切な研究方法を用い、大学院生が主体的に取り組み、修士論文を作成するように指導する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新井博：スポーツ史分野の研究指導を行う。ヨーロッパ、アメリカ、日本を含むアジア諸国における各時代におけるスポーツの実態や普及、組織化等に関する研究を指導する。</li> <li>・荒木雅信：スポーツ心理学分野の研究指導を行う。運動制御や運動学習、運動認知やメンタルトレーニング等選手や運動実践者の心理サポート等に関する研究を指導する。</li> <li>・白石龍生：発育発達学、学校保健分野の研究指導を行う。運動や生活等各種条件による身体発育、発達の違い、学校の安全性や、児童生徒の健康、保健等に関する研究を指導する。</li> <li>・藤田紀昭：スポーツ社会学、障害者スポーツ分野の研究指導を行う。障害者のスポーツを含むスポーツ事象の発生機序、意味や構造、メディア分析、歴史社会学等の研究を指導する。</li> <li>・吉田文久：スポーツ人類学分野の研究指導を行う。伝統スポーツの伝承や存続条件、各時代、社会における生活構造とスポーツ文化の関係性や変遷の実態等に関する研究を指導する。</li> <li>・小林寛和：スポーツ理学療法分野の研究指導を行う。スポーツ動作、スポーツ障害の発生機序と防止方法、スポーツリハビリテーションの方法や効果等に関する研究を指導する。</li> <li>・三井利仁：健常者および障害者のスポーツコーチング分野。健常者および障害者のコーチングの方法、コーチングに関するデータと分析、リスクマネジメントに関する研究を指導する。</li> <li>・住田健：スポーツマネジメント、スポーツビジネス分野の研究指導を行う。スポーツ組織のマネジメントに関わる諸課題、法律やファイナンス、スポーツ消費者やマーケットセグメンテーション等に関する研究を指導する。</li> <li>・竹村瑞穂：スポーツ哲学、スポーツ倫理学分野の研究指導を行う。スポーツの価値、本質論、スポーツのエトスや倫理、インテグリティ、アンチドーピング等に関する研究を指導する。</li> <li>・西村直記：スポーツ生理学、環境生理学分野の研究指導を行う。高地環境下、寒冷環境下、暑熱環境下でのトレーニング効果や生理機能の変化、運動と熱中症や体温調節等に関する研究を指導する。</li> <li>・山根真紀：トレーニング方法分野の研究指導を行う。各ライフステージにおけるトレーニング効果、効果的かつ安全な運動処方、女性のトレーニング等に関する研究を指導する。</li> <li>・山本真史：身体運動学分野の研究指導を行う。身体構造と機能、スポーツバイオメカニクス、運動と神経科学、運動制御に関する研究テーマを指導する。</li> </ul> |      |

|                                |   |
|--------------------------------|---|
| <b>授業の<br/>進め方</b>             | 第 1 回 先行研究の検討①<br>第 2 回 先行研究の検討②<br>第 3 回 先行研究の検討③<br>第 4 回 先行研究の検討④<br>第 5 回 研究の目的と意義の検討①<br>第 6 回 研究の目的と意義の検討②<br>第 7 回 研究の目的と意義の検討③<br>第 8 回 研究の目的と意義の検討④<br>第 9 回 研究方法及びフレームの検討①<br>第 10 回 研究方法及びフレームの検討②<br>第 11 回 研究方法及びフレームの検討③<br>第 12 回 研究倫理審査申請書の検討①<br>第 13 回 研究倫理審査申請書の検討②<br>第 14 回 研究計画発表会<br>第 15 回 研究計画書の修正 |
| <b>事前学習の内容<br/>学習上の<br/>注意</b> | <事前><br>授業の終了時に次回の内容を説明するので、その内容に沿って予習をする。(1時間)<br><事後><br>授業内容の復習をする。(1時間)   |
| <b>本科目の<br/>関連科目</b>           | スポーツ科学研究方法特論、スポーツ科学研究Ⅱ、スポーツ科学研究Ⅲ  |
| <b>テキスト</b>                    | 特に指定しない   |
| <b>参考文献</b>                    | ・ 出村慎一・山次俊介『卒業論文/修士論文の書き方』杏林書院<br>・ 監修/出村慎一 編集/山下秋二・佐藤進『健康・スポーツ科学のための調査研究法』杏林書院<br>・ 出村慎一『健康・スポーツ科学のための研究法』杏林書院   |
| <b>成績評価方法<br/>と基準</b>          | 研究計画に関する発表 50%<br>研究計画書 50%<br>100点満点で60点以上を合格とする   |

□演習科目（研究指導科目）

|        |   |     |
|--------|---|-----|
| 科目名    | スポーツ科学研究Ⅱ   | 2単位 |
| 担当者    | 新井博、荒木雅信、白石龍生、藤田紀昭、吉田文久、小林寛和、三井利仁、住田健、竹村瑞穂、西村直記、山根真紀、山本真史   |     |
| テーマ    | 研究計画に従って調査、実験を実施し、結果を適切に分析する  |     |
| 科目のねらい | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>           ① 研究計画 ② 研究倫理審査 ③ 研究方法 ④ 調査・実験 ⑤ 中間報告会</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>           本授業では研究計画に従って、研究倫理申請を通すとともに、適切な方法で調査、実験を実施し、その結果を分析する。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>           1. 研究倫理審査を合格することができる。<br/>           2. 研究計画に従って調査・実験を進めることができる。<br/>           3. 調査・実験の結果を適切に分析することができる。</p> <p>担当教員の研究指導分野次のとおりである。いずれにおいても研究目的を明確にし、適切な研究方法を用い、大学院生が主体的に取り組み、修士論文を作成するように指導する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新井博：スポーツ史分野の研究指導を行う。ヨーロッパ、アメリカ、日本を含むアジア諸国における各時代におけるスポーツの実態や普及、組織化等に関する研究を指導する。</li> <li>・荒木雅信：スポーツ心理学分野の研究指導を行う。運動制御や運動学習、運動認知やメンタルトレーニング等選手や運動実践者の心理サポート等に関する研究を指導する。</li> <li>・白石龍生：発育発達学、学校保健分野の研究指導を行う。運動や生活等各種条件による身体発育、発達の違い、学校の安全性や、児童生徒の健康、保健等に関する研究を指導する。</li> <li>・藤田紀昭：スポーツ社会学、障害者スポーツ分野の研究指導を行う。障害者のスポーツを含むスポーツ事象の発生機序、意味や構造、メディア分析、歴史社会学等の研究を指導する。</li> <li>・吉田文久：スポーツ人類学分野の研究指導を行う。伝統スポーツの伝承や存続条件、各時代、社会における生活構造とスポーツ文化の関係性や変遷の実態等に関する研究を指導する。</li> <li>・小林寛和：スポーツ理学療法分野の研究指導を行う。スポーツ動作、スポーツ障害の発生機序と防止方法、スポーツリハビリテーションの方法や効果等に関する研究を指導する。</li> <li>・三井利仁：健常者および障害者のスポーツコーチング分野。健常者および障害者のコーチングの方法、コーチングに関するデータと分析、リスクマネジメントに関する研究を指導する。</li> <li>・住田健：スポーツマネジメント、スポーツビジネス分野の研究指導を行う。スポーツ組織のマネジメントに関わる諸課題、法律やファイナンス、スポーツ消費者やマーケットセグメンテーション等に関する研究を指導する。</li> <li>・竹村瑞穂：スポーツ哲学、スポーツ倫理学分野の研究指導を行う。スポーツの価値、本質論、スポーツのエトスや倫理、インテグリティ、アンチドーピング等に関する研究を指導する。</li> <li>・西村直記：スポーツ生理学、環境生理学分野の研究指導を行う。高地環境下、寒冷環境下、暑熱環境下でのトレーニング効果や生理機能の変化、運動と熱中症や体温調節等に関する研究を指導する。</li> <li>・山根真紀：トレーニング方法分野の研究指導を行う。各ライフステージにおけるトレーニング効果、効果的かつ安全な運動処方、女性のトレーニング等に関する研究を指導する。</li> <li>・山本真史：身体運動学分野の研究指導を行う。身体構造と機能、スポーツバイオメカニクス、運動と神経科学、運動制御に関する研究テーマを指導する。</li> </ul> |     |

|                                |   |
|--------------------------------|---|
| <b>授業の<br/>進め方</b>             | 第 1 回 調査・実験方法の検討①<br>第 2 回 調査・実験方法の検討②<br>第 3 回 調査・実験方法の検討③<br>第 4 回 調査・実験の実施①<br>第 5 回 調査・実験の実施②<br>第 6 回 調査・実験の実施③<br>第 7 回 調査・実験の実施④<br>第 8 回 調査・実験の実施⑤<br>第 9 回 結果の分析①<br>第 10 回 結果の分析②<br>第 11 回 結果の分析③<br>第 12 回 結果の分析④<br>第 13 回 中間報告会<br>第 14 回 今後の研究の検討①<br>第 15 回 今後の研究の検討② |
| <b>事前学習の内<br/>容学習上の<br/>注意</b> | <事前><br>授業の終了時に次回の内容を説明するので、その内容に沿って予習をする。(1時間)<br><事後><br>授業内容の復習をする。(1時間)   |
| <b>本科目の<br/>関連科目</b>           | スポーツ科学研究方法特論、スポーツ科学研究Ⅰ、スポーツ科学研究Ⅲ  |
| <b>テキスト</b>                    | 特に指定しない   |
| <b>参考文献</b>                    | ・ 出村慎一・山次俊介『卒業論文/修士論文の書き方』杏林書院<br>・ 監修/出村慎一 編集/山下秋二・佐藤進『健康・スポーツ科学のための調査研究法』杏林書院<br>・ 出村慎一『健康・スポーツ科学のための研究法』杏林書院   |
| <b>成績評価方法<br/>と基準</b>          | 調査・実験及びその分析の状況 80%<br>中間報告会の発表内容 20%<br>100点満点で 60 点以上を合格とする  |

□演習科目（研究指導科目）

|               |   |            |
|---------------|---|------------|
| <p>科目名</p>    | <p>スポーツ科学研究Ⅲ</p>  | <p>2単位</p> |
| <p>担当者</p>    | <p>新井博、荒木雅信、白石龍生、藤田紀昭、吉田文久、小林寛和、三井利仁、住田健、竹村瑞穂、西村直記、山根真紀、山本真史</p>  |            |
| <p>テーマ</p>    | <p>調査・実験の結果を検討し、修士論文を執筆する。</p>  |            |
| <p>科目のねらい</p> | <p>&lt;キーワード&gt;<br/>                 ① 研究計画    ② 結果の検討（考察）    ③ 修士論文執筆    ④ 研究論文発表会</p> <p>&lt;内容の要約&gt;<br/>                 本授業では調査・実験の結果を検討し、修士論文を執筆し、修士論文報告会で報告を行う。</p> <p>&lt;学習目標&gt;<br/>                 1. 調査・実験の結果を適切に検討することができる。<br/>                 2. 修士論文を完成させることができる。<br/>                 3. 修士論文の内容を適切に発表することができる。<br/>                 4. 適切に修士論文を修正することができる。</p> <p>担当教員の研究指導分野次のとおりである。いずれにおいても研究目的を明確にし、適切な研究方法を用い、大学院生が主体的に取り組み、修士論文を作成するように指導する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新井博：スポーツ史分野の研究指導を行う。ヨーロッパ、アメリカ、日本を含むアジア諸国における各時代におけるスポーツの実態や普及、組織化等に関する研究を指導する。</li> <li>・荒木雅信：スポーツ心理学分野の研究指導を行う。運動制御や運動学習、運動認知やメンタルトレーニング等選手や運動実践者の心理サポート等に関する研究を指導する。</li> <li>・白石龍生：発育発達学、学校保健分野の研究指導を行う。運動や生活等各種条件による身体発育、発達の違い、学校の安全性や、児童生徒の健康、保健等に関する研究を指導する。</li> <li>・藤田紀昭：スポーツ社会学、障害者スポーツ分野の研究指導を行う。障害者のスポーツを含むスポーツ事象の発生機序、意味や構造、メディア分析、歴史社会学等の研究を指導する。</li> <li>・吉田文久：スポーツ人類学分野の研究指導を行う。伝統スポーツの伝承や存続条件、各時代、社会における生活構造とスポーツ文化の関係性や変遷の実態等に関する研究を指導する。</li> <li>・小林寛和：スポーツ理学療法分野の研究指導を行う。スポーツ動作、スポーツ障害の発生機序と防止方法、スポーツリハビリテーションの方法や効果等に関する研究を指導する。</li> <li>・三井利仁：健常者および障害者のスポーツコーチング分野。健常者および障害者のコーチングの方法、コーチングに関するデータと分析、リスクマネジメントに関する研究を指導する。</li> <li>・住田健：スポーツマネジメント、スポーツビジネス分野の研究指導を行う。スポーツ組織のマネジメントに関わる諸課題、法律やファイナンス、スポーツ消費者やマーケットセグメンテーション等に関する研究を指導する。</li> <li>・竹村瑞穂：スポーツ哲学、スポーツ倫理学分野の研究指導を行う。スポーツの価値、本質論、スポーツのエトスや倫理、インテグリティ、アンチドーピング等に関する研究を指導する。</li> <li>・西村直記：スポーツ生理学、環境生理学分野の研究指導を行う。高地環境下、寒冷環境下、暑熱環境下でのトレーニング効果や生理機能の変化、運動と熱中症や体温調節等に関する研究を指導する。</li> <li>・山根真紀：トレーニング方法分野の研究指導を行う。各ライフステージにおけるトレーニング効果、効果的かつ安全な運動処方、女性のトレーニング等に関する研究を指導する。</li> <li>・山本真史：身体運動学分野の研究指導を行う。身体構造と機能、スポーツバイオメカニクス、運動と神経科学、運動制御に関する研究テーマを指導する。</li> </ul> |            |

|                                |   |
|--------------------------------|---|
| <b>授業の<br/>進め方</b>             | 第 1 回 調査・実験の結果の検討①<br>第 2 回 調査・実験の結果の検討②<br>第 3 回 調査・実験の結果の検討③<br>第 4 回 修士論文の執筆①<br>第 5 回 修士論文の執筆②<br>第 6 回 修士論文の執筆③<br>第 7 回 修士論文の執筆④<br>第 8 回 修士論文の執筆⑤<br>第 9 回 修士論文の執筆⑥<br>第 10回 修士論文の執筆⑦<br>第 11回 修士論文の執筆⑧<br>第 12回 修士論文の執筆⑨<br>第 13回 修士論文報告会<br>第 14回 修士論文の修正①<br>第 15回 修士論文の修正② |
| <b>事前学習の内<br/>容学習上の<br/>注意</b> | <事前><br>授業の終了時に次回の内容を説明するので、その内容に沿って予習をする。(1時間)<br><事後><br>授業内容の復習をする。(1時間)   |
| <b>本科目の<br/>関連科目</b>           | スポーツ科学研究方法特論、スポーツ科学研究Ⅰ、スポーツ科学研究Ⅱ  |
| <b>テキスト</b>                    | 特に指定しない   |
| <b>参考文献</b>                    | ・ 出村慎一・山次俊介『卒業論文/修士論文の書き方』杏林書院<br>・ 監修/出村慎一 編集/山下秋二・佐藤進『健康・スポーツ科学のための調査研究法』杏林書院<br>・ 出村慎一『健康・スポーツ科学のための研究法』杏林書院   |
| <b>成績評価方法<br/>と基準</b>          | 修士論文 80%<br>修士論文発表会の内容 20%<br>100点満点で 60 点以上を合格とする  |